

証の雅集

新春号



noziri.

麻生路郎☆主宰

No. 428

Pensoj flugas trans la land - limon

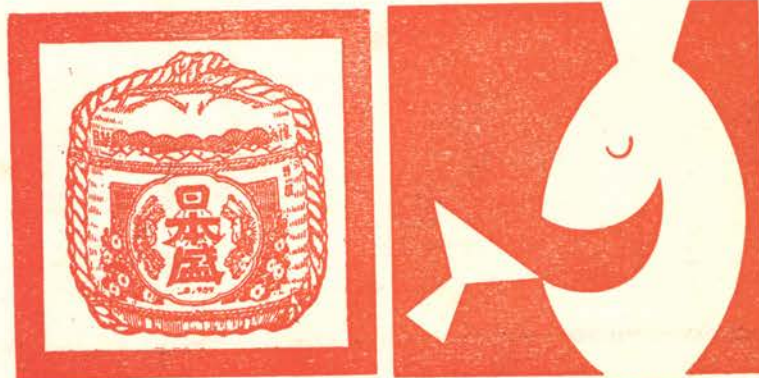
THE SENRYU ZASSHI

日本盛酒坊

灘の清酒

ニホンサカリ

新年の祝盃をどうぞ！



東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

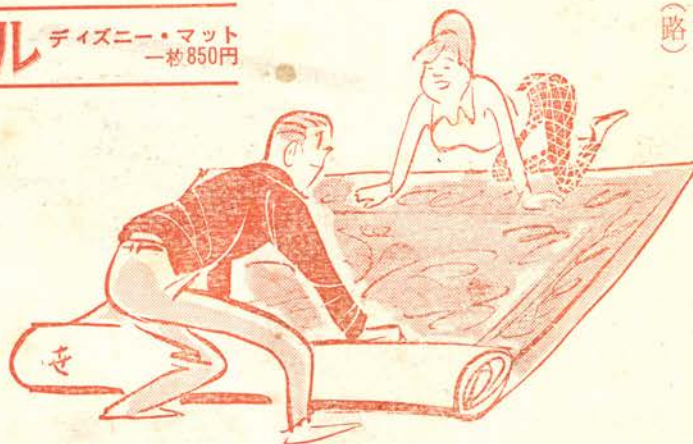
住江カーペット

タフトン 1帖 2,200 円

パンジー 1帖 2,800円より
4,000円まで

ローヤル ディズニー・マット
一帖850円

じうたん華やか
彼氏の女の
愛の日ひび
(路)



住江織物

住江織物株式会社

大阪・南・安堂寺橋通4 (電話81~88)

不朽洞句帖

麻生路郎

謹賀新春

一九六三年元旦



世紀をジャンプして生きんとす

アイデアを売る男なり 長屋に居

社会のふき溜りに生きる古銭にて

架空の乙女を抱いて死を待つか

にらみ鯛 父の回顧は尽きぬなり

前号訂正
錆びついた釘のようでも生きんとす

川柳雜誌新春号目次

題字	麻生路郎
表紙	野尻弘
不朽洞句帖	麻生路郎 (3)
新春雜感・噓其他	麻生路郎 (4)
二人道中由縁傳	中島生々庵 (30)
川柳と人間性	河野春三 (12)
私の好きな新年吟	諸家 (15)
特集「添削の実際について」	(26)
堀口 塊人・布部 幸男	
大野 風柳・清水 白柳	
母子色道指南	東野 大八 (25)
句評リレー	榎々・方大雄々・宗太郎 (32)
名句と難句	麻生路郎 (18)
大万川柳「尾行」 發表	(40)
★	
川柳塔	麻生路郎選 (6)
同舟近詠	諸家 (14)
近作柳柳	麻生路郎選 (20)
金泥集	北川春巢選 (20)
各地柳壇	麻生霞乃選 (35)
柳界展望	(38) 不朽洞会から (39)
不朽洞の人々	西いわを (39)
入門講座	清水 白柳 (34)
一路集	主役 丸尾潮花選 (36)
「里」心	河村日満選 (37)
★柳 柳 室・ベン	小西雄々選 (37)
★の散歩	(46)

元気でいこう
元気をつかむ

疲労・肩こり・神経痛

結合新活性ビタミン剤



ノイビダ®

新春雜感・噓其他

あそ
生路
郎

(一)

新春雜感——これが、もうウソだ。こそばゆいウソだが、どこへでも通るウソだ。アレはホントは歳末雜感だが、新春雜感だとして読んでやろうなどと、一々翻訳したり、訂正したりして読む人は稀にしかない。時間的にはウソだが、内容的に真実を伝えていればまかり通れる訳だ。

(二)

嘘々実々という言葉があるが、嘘々の世界の方が広くて面白いのではないか。極楽行きを勧誘しても、地獄の方がよほど人気があるのを見ても、そうとしかうけとれない。

(三)

私は一八八八年七月十日生まれだと、書きもし、言いもしているが、私自身それを証明することが出来ない。戸籍の届出に、ウソがあったり、過ちがあったりしたら、

私は年中ウソを吐いてる訳だ。私に責任のないウソだといえは、それまでだが、この意味から言って、私は歴史を信じない。例え読んでも、伝説や講談以下の興味しか持てない。

(四)

嘘の世界で、もっとも派ぶりのいい嘘は政治家と商人のウソだ。常に嘘を製造してホクソ笑んでいる彼等であるからだ。学者の嘘は嘘と知らずに吐いている場合が多い。芸者やバーのマダムの営業用ウソは論外である。

(五)

ウソも数字の世界は大きい。数字だとヌッテンコロリとまいらされる。首相や大会社の社長などは統計のウソを基盤にして予算がどうの、経済成長率がどうのという。この手が、一番欺ますのに便利だからだ。

(六)

統計のウソぐらい、しかつめらしい顔をしていて、その実ウソッパチなものはない。どうして、何処で生まれたか判らないトータルが出ている。これは山の中の林からの一ト峠が流れ流れて大河になるようなものである。統計の数字は自分の生年月日を信じるように鵜呑みではダメだ。

(七)

手品のウソには欺まされていても快感が伴うが、統計などのウソにマンマと欺まされていくことを知ったら、自分の無知さを笑ってはいられないだろう。

(八)

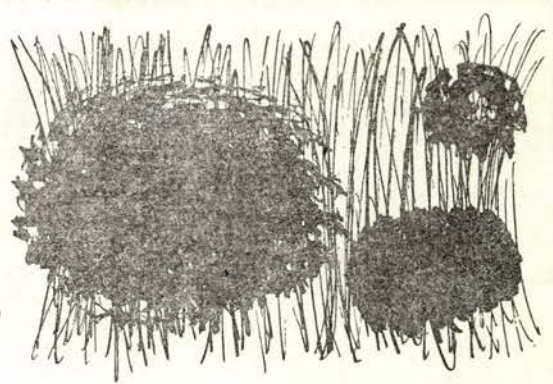
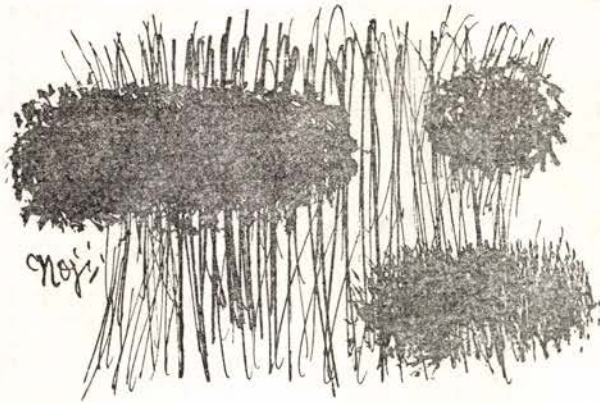
花を愛したり、鳥を愛したりする人は性格的に世間のウソに堪えられぬからであらう。それは一種の逃避と見てもいいだろう。

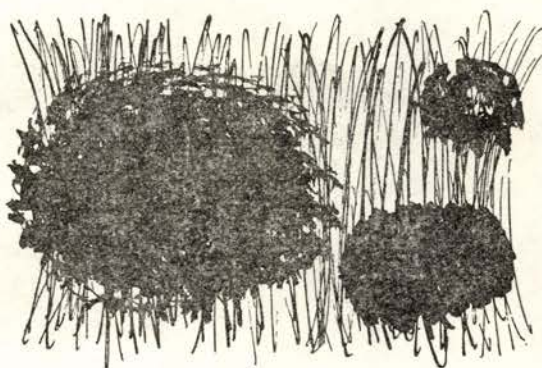
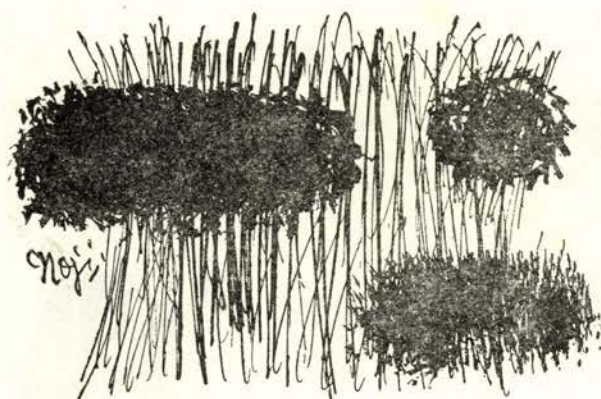
(九)

手品のウソや講談のウソはバカバカしいと思いつながら、快感により、顔面筋肉をほぐさせてくれるものであるが、愛児や愛人のウソの言動は限りなく悲しませるものだ。

(一〇)

バイ菌の繁殖力率にウソはないとしても、有害毒にウソはないとしても、金持ちと貧乏人とは、その影響力が違うのは面白い。金持ちはバイ菌に弱くてコロリとまいるし、貧乏人はバイ菌に強くてピンピンし





ている。天のハイザイの妙味とはこんなところにあるものか。

(二)

ムキになって失敗をする人がいる。こんな人はウソが言えないのが短所だ。与太ッ八で、つかまえてどこかがないのに、要領を得ている人がいる。正直に生きようとする人が気息奄々たる所以か。

(三)

同じ言葉をAが言うと、相手はムツとして気を損じるが、Bが言うと、相手はアハハと言って意にもとめないことがある。これはその人の人柄によるので、むしろ生まじめな人の方が大抵の場合、ブが悪い。

(四)

腹乃の句に、
うそうそうそ木魚の音もそう響くと、いうのがある。腹乃の個性がよく出ている。

(五)

巧い句を作ろう——と、アタマをひねって、ひねりあげた句が、よりによって拙い句になっている場合がある。その句には作為が巾をきかしているからだ。

(六)

堂々と川柳に論陣を張っている人が、イザ作句となると、ギコチない句ばかり並べているのは自縄自縛で、思想の骨格ばかりで肉をつけることを忘れているに外ならない。肉ばかりでも困りものだが骨ばかりでは句にならない。

(七)

借り着は何んとなく身にそわないように、よその畑の詩論を鵜のみに、川柳論へ持ち込んで来る人がいる。消化不良の川柳論にはそんなのが多い。

(八)

前衛派とか称する人たちの句に消化不良の句が多いのは狭い部屋の中で、ナギナタを振り廻わしている感が深い。自分にふさわしい武器を早く発見し、自分らしい句を作ることである。

(九)

中間派と称している人はいないが、他派からそう目されている人たちの恐るべき敵はむしろ悠々として型の如き句を作ることである。従米の生花の如く、美しくとも、えてして生氣に欠けるからである。

(一〇)

本格川柳を自称する人たちの句は句そのものが本格でなく、昔、葉屋が本家・元祖を唯一の守本尊としたように、本格という文字に傾倒しているようにしか思えぬ。論議と作品とが一致していない点では前衛派に劣らない。社会党が一部の労働者を代表するようにならなければならぬ。私などはむしろ前衛派の将来性に期待したい。

(一一)

没句を気にする人がいる。没にした人々を、とやかくと批判や、非難をする人がいる。何故没になったかを真ッ先に検討して見るべきではなからうか。

(一二)

同人雑誌で刊行される、自選句集が大変歓迎されるようであるが、それは雑誌経営者が没句の再生にお辞儀するのワザに外ならない。没にならないのを唯一の頼みにワッンサと詰めかけるのである。

(一三)

作句は趣味であっても選は慰さみにすべきものではなく厳肅に慎重に真剣にすべきものである。他人の優れた労作をヤミからヤミに葬むことは恐るべき罪悪である。

(一四)

選者無用論を称える人がいる。その意気大いに壮なりと言えよう。そうした人には一人で一冊誌の刊行をすすめたい。ただしハガキ刊行はダメ。



結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣装も
豊富にそろえております ● 6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171



川柳塔

西宮市 若本多久志

どっこいしょと女房輪をとり

六十も相談したい人が要り

損得で親の用たす子に育ち

噫これが竹馬の友か足をひっぱり

大阪市 正本水客

蜂に似た少女の腰がとんでくる

応接もこさえ無人のままに過ぎ

腕組みをほどいて帰る支度する

黙って頭さげたは他人に頼らぬ気

返事も書かぬほど自分の心が恐く

高槻市 丸尾潮花

ロマンスグレーそんな言葉をなつかしみ

男みな痴漢に見えてくるきりよう

虫も死ぬ落葉のうず包まれて

いけずといけずがお好み焼きをたべ

熱海の旅

兵庫県 小西無鬼

現世はお宮が貫一蹴るならん

代書させといて器用貧乏とは何や

大阪府 西いわを

学長さんたまにバチンコやんなはれ

痛であつたかと死ぬ際に思い

住友も薬を作る事覚え

大阪市 北川春栄

馬鹿でかい活字踊らせスポーツ紙

ラジオ寄席中学生はナガラ族

リュック背負うても女の薄化粧

ネックレス聴診打診の邪魔になり

ホノルル 築山快夢起

華府入りの日系上議は移民の子

知事選で竹馬の友と仲たがい

ワイマル 羽佐間柳葉

有る振りを持つ振り女派手にする

恒産はないが良妻あるのなり

聖壇の前では階級の蔭薄し

堺市 吉田圭井堂

セーラーに着替えて羽根に挑戦す

株屋らしく卯辰上りとはしゃいでる

借り衣裳明日はどなたがつけるやら

クラス会出世頭は来ぬ返事

四日から店を開いて立って食う

防府市 長野井蛙

女医若く男の不潔が目により

尺貫に直して明治納得し

岡山市 直原七面山

喪服着ていても色気の漂う妓

天使どころかしなびきつてる婦長殿

金魚悠々娘の失恋など知らず

澄ましても夜は娼婦と化する身の

会長はつんば座敷にいて平和

大阪市 西森花村

忙しさパイプも掃除せにやならず

夫へのかたみ子供と洗濯機

一人して対えば遺墨声があり

美人なりイミテーションがよく似合い

パパパパと日曜母子で酷使する

鳥取県 河村日満



三朝白狼にて

海に在る錯覚もよし温泉のけむり

蝗とぶ道自転車も酷使され

豊中市 足立春雄

万年筆悲しい便りも書かされる

字句一つ直す会議に小半日

倉敷市 木村千容

行幸の道筋さえも知らぬ僕

水の泡みたいな生命たよりなき

倉敷市 田垣二方大

悪名も金が出来れば消えており

社長邸社運のわかる年始客

年始客だけでのんでる応接間

加賀市 野村味平

香林・若菜氏追憶吟

壺坂のさわりのところがちとちり

湯豆腐にしたらと女房手ははぶけ

米の値が上がり賃スト長くなり

ほんぽんが歌えばパパもツイストで

息抜いたとこで横綱うっちゃられ

大阪市 真鍋一瓢

信じる人を持たず淋しいメーキャップ

尻浮いた頃へY談家の仲居

恋の清算二辺は死んだ抱き合うて

グラマーの全身売って二カラット

死亡ゼロの日を裏切った旗なびく

大阪市 佐野白水

妻と子が肩たたき合う遺伝

娘にボート漕がせて乗れる歳になり

原料も製品も横文字になる時代

大阪市 後藤梅志

短かいコート着て競輪の女貸元

非妥協の瘦身切れ過ぎる刃物

ケニヤから象の絵葉書ばかり来る

香林氏夫妻追悼

一本気だった最後も淨衣着て

米子市 小西雄々

車庫出れば車掌勤めの声となり

挨拶のしかたも母に聞いて出る

大阪市 山川阿茶

一寸地味女史でゆく日に着るとしよう

ふりあげた手のゆくとこへ世界の眼

大阪市 金井文秋

嫁入りで雑誌購読うち切られ

どの席も選挙が近い顔を見せ

着るものはございますかと秋が来る

自分よりデブがいますので気をよくし

正直なところと一つ嘘を入れ

加賀市 那谷光郎

子女がなく鬼灯赤く庭に映え

爪切りましよう日の先生の長い爪

蠅リボン蠅特攻に似て死んだ

下関市 桜川不水

眼鏡越しあなた近頃変だワヨ

ダイヤよりきれいな露に風があり

岡山市 浜田久米雄

見違える程元日をめかして出

新年のあいさつ背がかがんで来

一年の計に冷蔵庫を加え

岡山市 逸見灯竿

おえら方は国体百姓は稲を刈り

胃袋の穴から命洩れんとす

出雪市 尼緑之助



三瓶山にて

山の宿こんなところにヌードショウ

運転手ふと虚無に入る違反

公休をさせていただく国旗立て

大阪市 水谷 竹 荘

失恋を笑って話せる歳になり

下駄箱の上まで菊を生けて見せ

柳井市 弘 津 柳 慶

熊本見物

てれくさく土産にズイキ買って出る

観光にここも御城を改築し

鳥取市 杉 谷 湖 山

故郷の近くで舗装チョン切られ

辻妻を合わして女に会う文度

尼崎市 小 林 文 月

碁客去り五目並べの老夫婦

囑託の意見承っておきましょう

奈良県 飯 降 白 香

席ゆずり少年恥かしそうに立ち

まちかねて級長になったとつげにくる

奈良県 西 辻 竹 青

良妻であったを今になって知り

四選へ対抗のない恥しさ

公用として玄関は出たけれど

岡山県 福 島 鉄 児

へそくりも入れて落した免許証

岡山市 服 部 十 九 平

新調の道具隣に使われる

おばさまがチャンスは今と袖を引く

尼崎市 長 谷 川 三 司

振り返える恋は半端な恋なりき

一口は義理二口は無理な寄附

その昔剛じんだ女仲居で見

恋の過去いわぬも女心かも

西宮市 若 林 草 右

停年のあとは下駄にも好みで

知事選の写真の隣りは指名犯

岡山県 田 村 藤 波

住込の気楽さ世帯を持って知り

抽斗で香水蒸発しておった

無報酬を好きでなっとるように云い

彼女とのテープが一番先に切れ

岡山県 本 田 恵 二 朗

思い出の丘で老妻笑い出し

京都市 松 川 杜 的

傾城の意を中学二年知ってよる

あの娘嫁ったか絶えて琴の音がせず

堺 市 高 崎 雄 声

長ズボン男かよわいものと知り

島根県 藤 井 明 朗

養老院無学同士はうまがあい

盗まれてよい唇は油断する

政界の多難をよそに米が出来

十二月もう慣れあいのストになり

岡山県 永 松 東 岸

活字だけ読んでその肚読んで居ず

祖父さんの法事に三味線持ち出され

事務室の空気にそわぬ備前焼

倉敷市 野 田 素 身 郎

金のないアベック公園から立たず

お通夜のようなねと妓ひとり飲み

寒波来て駅の便所もこんでくる

自動車を買いましょうよと妻無邪気



大阪市 清水望峰

唐津市 新岡回天子

大阪市 児島与呂志

ニヤニヤとヌード芸術観賞者

良い月だ一人で帰るも雅趣があり

つるし柿故郷を忘れる俺を追ひ

最後まで信用させていた自殺

岡山県 池田古心

大阪市 橘高薫風子

貰う身で賄賂の味を噛みしめる

会議会議と上役は何時も留守
子に世帯譲って手助け損と云う

元日や王城の内写される

栈橋の未練ヘテープ風に舞い

川の面の煙突の影音楽的

六法全書の重さと聖書の重さ

大阪市 伊達堰子

東京都 石居高志

行灯の灯は恩愛を思わしむ

コンペアー役所仕事の雨ざらし

金ありと見たか頼みもせぬビール

暮れる京 鐘は西から東から

大阪府 早川清生

道で逢い道で別れぬ十二月

天王寺にて

店の壺どれも貧しき町うつる

米子市 石坂新雪

のみ錐に阿は泣き呼はくいしばり

読まぬこと幾日愛のもつれおり

帰るのも忘れ銀婚近づいて

大阪市 不二田 一三夫

逮捕前少女と清い刻をもち

良人にも見せぬ笑顔を猫に見せ

処女でなく嫁いで商家きりまわす

のし紙に雅号の書けるめでたい日

トレードに出してほしいと養子云う

パーマ屋で妻の平凡見た知識

大阪市 西山 晃

兵庫県 酒井ひか平

大阪市 西田柳宏子

真実はないが弁舌さわやかな

川柳ささ山百号記念

日曜日我家の紅葉にも気付き

七堂伽藍み仏は不在なり

百号を置く卓上に菊薫り

十二月尺八もゆっくり吹いとれず

鳥取県 田中蛙眠子

テーブルセンターあみかけにして嫁にゆき

テレビ初出演して

若屋市 丸川 初甫

二ヶ月も前から騒いだ五分間

噴煙にむせてきそうな美美子の碑

根気よう小型タクシー待って濡れ

堺市 辻 圭水

むせぶよな情歌泡盛り汲みながら

色直し頭がとれてホツとする

修養を云わず技術をうらやまれ

日南海岸

市川団十郎を観て

ピンクムード目の鋭さを失われし

ヘニツクの並木は海の果へ落ち

「海老サマ」のままのファンの女連れ

客用の履歴もホステスこしらえて

青島



アパッチが出てきそうなり椰子の浜

立売りのピロード笠も異国めき

神戸市 仲 どんたく

竜安寺にて

苔^{しめ}湿す冷雨を聞いている二人

又同じ場所に出て来た京の街

平田市 久家代 仕男

秋深し納骨堂も菊をさし

貧相で誰も主任に見てくれず

大阪市 本 多 柳 志

六甲へビッケルも買い地図も買い

分譲地へ来て定年のうまがあい

事かおになると譲らん姉妹

出雲市 原 独 仙

停退をして見違える肥りよう

初夢を願って富士の軸をかけ

新潟県 高野 むじな

近眼に眼鏡をかえて株価値む

長男満十才

芸一つ出来るを秀才扱いし

相談欄男女のあるかぎり

祝酒今日は呑む気で来てる顔

指名手配軍服を着たのが混り

大阪市 石 倉 旅 風

使えたら使ってもらう鋸を貸し

連休の雨なら当てる気象台

職探す人も混っているラッシユ

にせ札も来たであろうが右ひだり

神様も碎けて呼べる戎っさん

独り旅夕陽に西をおしえられ

水の無い名勝へ来てから疲れ

インドアだけでも趣味はゴルフとか

大阪市 魚 住 満 潮

続西成界わい

膝頭抱いて正月迎えたり

強盗^{クダキ}の相談チューインガムを噛みながら

凧の中でダフ屋が佇ちつくし

ペンで喰える男もいてる西成区

愛媛県 村 上 旭 童

もの腰に似ぬがんこさもあり農夫

つかれたともいわずに夜釣りには出かけ

神戸市 傍 島 静 馬

遠路来て遊覧船で喧嘩する

ラッシユアワー他人の背中に載せて読み

笠岡市 木 山 遠 二

ボヤボヤして四円のはがき買いそね

大物小物寸を描えたいろは順

日々好日使えば妻が払うなり

番狂わせの他はズラリと炭団なり

大阪市 中谷 ハナ子

寒村の雪子どもばかりが喜びて

大阪市 河 井 庸 佑

昼は地味に地味に着ていて夜の蝶

大阪府 谷 沢 好 祐

ダンスする時だけ夫唱婦随にて

見覚えの柄スカートが子の服に

泉大津市 高 津 徹 也

初雪を弱い体も眺めたく

えりまきを枕にしきてさいはての地へ向う

愛媛県 榎 紫 光

落選をしたら他人の顔になり

競争のように社宅は子を孕み

誘惑に乗らぬ気景色ばかりほめ

青森市 工 藤 甲 吉

初孫「伸」誕生

この孫のためにも戦争許すまじ



泣けば抱くことを赤ん坊いつか知り

「わが家」出来る

わが家にわが名を掲げ仰ぎ見る

豊中市 林 夢 虹

青春の有り金全部バラを買う

クリスマスバタ屋車の鈴の音も

西宮市 山 本 一 傘

ブラットにひとりも人が居ぬ寒さ

本性を現わしやくざしている

大阪市 今 西 生 薑

パチンコヘチョークの指の非力かけ

ホステスの眼にスカンピンベレー帽

京都市 室 井 八 九 寸

一等が自若特急洗面所

「大きな声でいえない」ことを全国紙

岡山市 横 山 一 声

我が庭の紅葉はこうようせずに散り

入歯出来るまでのマスクとは知らず

小松市 関 戸 宗 太 郎

火事見舞い遅れをとらじ市議県議

別室で最終案を妓等案じ

石川県 高 山 涼 髪

子の爪も染める愚妻のレジャーなり

ニコチンの染みる指して小商人

美禰市 安 平 次 弘 道

アドバルンの数も増えてる十二月

性格相違家裁は性の不和を伏せ

欲すてりや身内に死期をうわさされ

交通事故の例を保険屋たんと持ち

にせ札を探すに庶民の欲を借り

宇部市 平 田 実 男

特売場の雰囲気いらぬのも買わせ

妻連れているのにターさんなどと呼び

諫早市 川 岡 靈 眼 子

香林・若菜の死を詠う

子があれば朽ちる林もなからむに

旅終えしとこが香煙のほるとこ

大和郡山市 中 内 孚 彦

見つめられいつも折れちゃう男だよ

環境が女に強く育てあげ

母に英語使ってケンカをすませとく

貝塚市 杉 本 一 鶴

平和記念日いらぬいほどの平和米よ

大安へ新婚さんでホーム埋め

大阪市 本 多 清 人

結局は泣かして父の守がすみ

富田林市 浅 川 八 郎

遠大の野心なくもないが蛙の子

嫁き後れをあれ程嫌っていたものを

足の表情顔にそぐわず女

岸和田市 内 藤 き さ 子

灯台に勤めて口の重い性質

薄化粧の方へ軍配あがりそう

地味好みがもう嫌になつてきた四十

何にかしら泣けば気の済むような日も

口出せば損な立場と知りながら

青森県 木 村 涼 人

小林不浪人句碑除幕

句碑除幕亡師よ弟子等此処に在り

ゴルフ族所詮は違う周波数

立札で役所は監視したつもり

保守党を支持し和服が性に合い

大阪市 唐 崎 専 翁

南方は若い皇子に一任し

倉吉市 奥 谷 弘 朗

新聞をとるほど療養続くなり

川柳と人間性



河野春三

1

ここに一人の人間があるとし、す。たとえば、河野春三なら春三という人間をよく考えてみますと、どうも春三という人間の中には二人の春三が住んでいるようであります。

Aの春三が右へ行こうとする、Bの春三は左へ行こうとするのです。常に相反する性格をもつたA・Bの春三が互いに争い合い、牽制しながら一つの春三というものを外形的に形成しているといよいでしょう。

神と悪魔、善と悪、正と邪、真と偽、実と嘘、進歩性と保守性、良心と非良心——凡そそうした正

反対の対立が、激しく私の体内を揺さぶりながら、斗争していつても究極のところは、一つのバランスを保つことに於て、極めて平凡な常識的な春三という人間が外見的には、平気で世間を渡りあっているものであります。

夏目漱石の小説の中に（今題名を思い出せませんが）主人公が坐って表を通る女を見ていると、通る女の九〇パーセントまでに、何かの意味で惚れてしまうというような事が書いてありましたが、私も或いはそうかも知れません。キリストは「心に姦せるものは、すでに姦淫を犯したものである」とか言ったそうですが、そうとすれば、私などは既に極悪罪人として、処刑の十三階段をのぼっているべき運命にあると言っても差支えありません。

谷崎潤一郎の若き日の小説にも、誰にも年少時代盗癖のあることを書いたものを見受けましたが、人の心中に去来するものは常に悪のかたまりのようなものであると言つてよいかも知れません。にも拘らず、現実の私はつい警察の御厄介になったこともなく、極めて一見善良（？）な市民として大きな顔をして物を書いたり作品を作ったりしていますし、世間もそれを別に不思議とも思っていない。

この恐るべき「仮面」は春三が死ぬまでかぶりつづけることでありましょう。

それは結局、Bという春三の「悪魔」に対してAという春三の「神様」が、春三の行為を批判し、調和させて、行為としてまでの前程に於いて、私の悪心を打ち消してしまふからなのでしょう。

私が若い頃に最も感銘を受けた本に、親鸞の「歎異抄」があります。この本の初めの方に「善人なおもて救わる、いわんや悪人をや」という個所があり、私はハッと打たれたことであります。「悪人なおもて救わる」というのならば、善人が救われるのは当り前の事であり、善人なおもて救わる、いわんや悪人をや」という

のは誠に仏の大慈大悲であるといわねばなりません。肉食妻帯を敢えてした人間親鸞は私の興味を惹くところですが、私は無神無仏主義の男でありますから、この本の仏への帰依云々のことには関与しませんが、自分の悪を自覚することには於いて、この親鸞の深い教義、他力本願の根本信念には大きい影響をうけた事は今でも変わっていません。

私はキリスト教徒のごとく、それも旧教徒のような身の清純と、物欲排除のピューリタンの精神生活をも亦希求することも、人間として生を享けたからにはそうありたくも願い、憧れを持っていることも嘘ではありませんが、その瞬間にそれを裏切る悪の芽生えに苦しんだ青年時代を思い出します。

子供の頃、近所にメソジスト教会の熱烈なクリスチャンがいて、私を日曜毎に日曜学校へ連れてゆき、お祈りをさせ、讃美歌をうたわせ、神の信仰を説かれましたが、何だかしっくりしませんでした。

その教えを説く牧師の家庭が年中夫婦間がうまく行かず、もめている事を知っていたために何か現実生活と神の信仰の間にびたりせぬものがあつたからでありました。後年私が書店を経営していた時も、本屋の友人で熱心なクリスチャンがいましたが、その男も

2

内緒で酒を浴びるほど飲み、遂には公金を横領して罪に問われましたが、それでも彼は神に懺悔ばかりしていました。私にはそんな白々しいザンゲンなどしたくても出来ません。

キリストへわれあやまちを再び河野春三 この句は十数年前岸本吟一君が「河童」句会をしていた頃、句会にあまり出席しない私に、吟一君が度々すすめてくれたので、大山竹二君や摂津明治君等



と選者に指名されていた関係上やむを得ず出席した時の「再び」という兼題で作った私の作品で、たしか亡くなった大石文久君が、秀逸として抜いてくれたものです

が、この作品の意味は前述の私の話を読んで下さった読者にはお判りの通り、悪人である私は、キリストをあざむくような機軸を平気でくりかえす事が出来ないという気持を詠んだものであります。

私はいつも思うのですが、私が仮りに神や仏であつたらどうでしょう。か。おそろく退屈して困ったことでしょうし、又サタンであつたならこれ又三日とは持ちますまい。

ゴッドであり、デビルであり、過ちを犯したり、悔い改めたり、毎日その連続の中で生きていて而も親鸞が言つたようにこの悪人が許されているのだということの自覚からよく考えてみると、人間に生まれたことは有難いことであり生甲斐のあることであると感謝しています。

先程述べた牧師さんも、公金横領のざんげ男も、実は「人間」であるということの証拠であるといふことになります。

私達は動物であるということに於ける本能と、人間である動物にない性格を同時に享有しているという厳密な事実——これを凝視することから、私の川柳は生まれます。いうなればこの人間性のギャップを衝くところに、私の川柳の基盤があると確信しています。

療養所に呻吟している人々や、死刑囚などの短歌作品集などが近

頃よく出版され、それらに多くの感動を与えられるのは、人間最大の問題である「死」ということに直面したり、その思考に頭を悩ます人々が、人間性を真剣に凝視し、反省し、痛烈に自己を剔抉してゆくからこそ、読者の胸底に感動を与えるのではないでしょう。

嘆きの底に阿呆な俺を見る
極道の血にて鮮かなるが哀しい 同

この作家は若くして肺を侵されて死んだ金沢の作家であり、十数年前、川柳「私」誌へ送つてくれた死の直前の作品の十句中のもののですが、死の床にあつて、自分の人間性を凝視したところから生まれたものと私は推察します。この句の阿呆は単なる「阿呆」ではありません。瀕死の作者の自省と、剔抉精神が追いつめた「阿呆」と見てよいと思います。

次の句は咯血した血のいろの美しさの凄惨さと、「極道」を直結させた人間としての宿命と反省が、「哀しい」という——普通なら平凡きわまる結句が却つて真剣に迫つて来て私達を泣かせるところ、川柳というものも、真摯に追求すれば人間性のギャップを衝く鋭い短詩となると思わずにはいられません。

「阿呆」といえば、いつの事であ

つたか「ふあうすと」誌に
風邪の子を残し句会へ行く
阿呆

という句があつたと記憶します。作者は三条東洋樹氏であつたと思いますが、或いは思い違いであるかも知れません。

ところが誰かが同誌上でこの句を評して「いくら句会が好きで、川柳に熱心であつたとしても、熱のある子を放つたらかして句会へ行くなどはどうかと思う」という意味の批判があつたと記憶していますが、それはもつての外で、この「阿呆」といい切つたところに、実は子供への愛情が、人間として、親としての反省の形で痛烈に表現されているところを見落としてはならぬので、いわば自己諷刺として私は受けとつたのですがどうでしょう。

3

最近「裸灯」という句集を出した柳友亀井勝次郎の句にも、彼が最も人間的な人間であるだけに、その探究が、川柳という短詩に氷結している句が沢山あるので少し拾つて見ましょう。

- ① 童話では救いの綱が下ろされる 亀井勝次郎
- ② 釘を打つ自我を打つことしきり 同
- ③ 教会の扉われに閉ざされしませ 同

④ 深夜の時計が生きて行け
と言う 同

⑤ 瞬きもせざり嬰兒の瞳を
怖る 同

あればきりがないので五句だけにしましょう。

①の句では、童話の世界ではどんな困った場合があつたとしても、いつかは救いの綱が下りて来てやれやれとハッピーエンドが来ますが、実人生ではそうは甘くは行かない。人間生活に於ける苦難は自分自身が解決するしか仕方がないと作者は、自分をみつめているのです。

②の句では釘を打つという単純な行為をしつても、彼が恰かも釘が自分自身を、この執念の自我をうっているように感じ、自虐の気持をうったえているのです。

③ 教会の扉は押せば開くに決つ

ています。

「信する者よ来れ」であります。その扉が閉ざされたままというからには自分の人間的罪障に対する自嘲が、そう感じないではいられないものがあつたに違いありません。作者の鋭い自己嫌惡の追求と見てはいけないうか。

④ 深夜である。物音一つしないう沈黙の中で、時計のセコンドを刻む音だけが作者の心を打つ。昼の狂想曲の中で遮二無二人間としての喜びや悲しみや憤りや——そうして果てには絶望的な虚無的な気持を抱いていた自分が、物みな寝静つた深夜に、あたかも時計の音が「力強く生き抜くんだ」という天の啓示のように聞えたという救いを作者はこの句に定着させたのであります。

⑤ 赤ん坊の瞳は、またたきもし

謹賀新春

中島生々庵
若本多久志
松江梅里

大阪市南区鰻谷仲之町二〇
西宮市津門西口町五〇
大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇

詠 近 舟 同

大阪市 橋本 緑雨

写真機一つで秋を探しに出

秋芳洞えたいの知れぬ岩ばかり

貯水池が紅葉のうつるとこに出来

交通マヒ居眠りがしたくなって来た

須坂市 高峰 柳児

秋の蠅舞い上っても逃げきれず

通話料払って女に振られてい

さきやかな年金孫に貰いで居

豊作へ二男三男たかりに来

官判不機嫌な日へはかどらず

東京都 阿部佐保蘭

祝電へかしこまってる膳の鯛

東京へ明日は出て行く鯛の色

秋すえて成人式の顔になり

鯛焼ですませて女詩人なり

和歌山市 秋月 宏方

ホームバーここは原価で飲めるとこ

大晦日の晩に冬物買うくらし

キユーバの危機去る

米ソの坊や喧嘩せなんでもよかったね

今治市 長野 文庫

呉子孫子なども繰り出す出版社

家康の真似を通用さすつもり
過去の無い若きズバリものを云い

大洲市 米沢 暁明

蠅も食堂車へのの抜目なき

くつきような農夫へ牛が細すぎる

城思えらく記念写真の背景か

こんな山奥にも煙草やとバーマやと

今治市 月原 宵明

背広着た遍路ビールの罐をあけ

松山六が月で郷里今治へ転動

転動へ母が無いと云う子連れ

不渡りをやと免れクラブ振る

銀行が上座に坐る船おろし

一すじの煙が秋をわびしく

空港で出迎えられた総会屋

名古屋 長谷川 鮮山

よそ眼にはようて子のない共稼

恩返し今度こそそすの負けざらい

京都市 布部 幸男

年首回顧

箸紙にマジックインキ新たなり

新年の酒亡き友を救えつつ

泥酔をしたも門松あったこそ

生ボンヤリしていれば見逃がすよ

うな事柄が、作家の真剣な心眼に

は一つの発見として、川柳に表現

するというのが出来ると思いま

す。

これも私の旧友ですが、

あわれサンドイッチマンに

手がある

和田三絃

という句があります。街をゆく

サンドイッチマンからは道化の

姿や、掲げられたブラカードしか

私にはうつりませんが、作者はその

のピラをくれたサンドイッチマン

の、多分に汚れた、あかぎれでも

出来ていたであろう「手」(ある

いはうつろな眼をも含めて)を見

つけたのであります。この発見が

作句の動機となっているのであり

ますが、その「手」が象徴すると

ころにはそのサンドイッチマンが

背負っている生活、妻や子の貧し

い姿が作者のヒューマニズムの具

象化によって私達鑑賞者に感動を

与えるのです。この初五の「あわ

れ」というような感動詞は下手に

乱用すると、甘くて鼻持ちのなら

ぬものとなるのですが、この場合

は、手を強調するために厭味のな

い極めて適確に生かされているこ

とにも作者の用意を注意したいと

思います。

発見ということから思い出すの

は

君見たまへ渡菰草が伸びて

いる

の句で、川柳雑誌一巻十一号に

載った作品ですから四十年の昔の

句を出されては路郎氏も苦笑され

るかも知れませんが、発表された

当時の私達新進作家に与えた影響

は大きいものでありました。恐ら

くは作者が鳴尾に居住された時代

での句で、まだ今日のように開け

てない鳴尾の庭の一隅か、路辺か

で、ほうれん草の伸びている姿を

発見して、驚きの声をあげたこと

でありましたろう。これが、れん

げや菜の花なら、あたりまえの句

にすぎないものを、ほうれん草の
伸びたけた姿を見つけたのは、詩
人としての発見で、「君見給え」
の上五に、驚きのいろが判然とし
ているのです。私達当時の新進作家に一つの詩
的開眼をもたらせた貴重な一句と
して強く印象に残っています。ヨクヨ
便箋

作家は自分を、社会を、自然

を、自分の手で自分の眼で常に観

視することを怠ってはなりません。

そうすればそこに短詩として

鑑賞者の胸底をうつ感動が生まれ

出ることを強調してこの稿をおわ

ります(一九六二、一〇、二九)

私は「川柳は人間詠の短詩で
ある」と規定し、主張して来まし



私の好きな新年吟

・ 特 集 ・

(順不同)

初春の気分は、まずなんと言っても新年吟からであろう。柳友からの賀状にそえた一句には、ほのかな温かみを感じられるのである

三ガ日には 先生の名句を

長谷川三司

路郎

これは説明するまでもなく麻生路郎先生の名句である。

私は毎年元旦にはこの句を床の間の短冊と掛けかえる。そしてその前に座ると過去一カ年の善悪、公私取りまぜ世の中の出来ことが雲のように拭い去られて新しい年を迎えたという厳肅な気持ちになる。

そして新春だなアとしみじみと思う。

その先生の短冊も正月三カ日だけしか掛けないのにもう大ぶん古びて短冊の色が変わって来ているが今でも掛けている。

人間が火星や月世界へ旅行する時が来てもこの元旦を迎える心は変わらないだろう。私のような明治生れのものには特にその感が深い。毎年多くの柳友から年賀状をいただくがそれには大なり小なり句が書いてある。柳人ならば当り前のことで、たまに句のない賀状などが来ると何か落し物をしたような気持ちになる。

私も今までに二三、賀状に新年の句らしいものを書いて出した事があるが、後で読み返して見ると

不出来で、どうもおもしろい句がないのでつい不精して賀状は失礼し勝た。

今年も句が出来ないまま、とうとう年賀状はどこへも出さず失礼してしまつた。

私の好きな

新年吟

内藤きさ子

福寿草 松にしたがいそわかしこ 霞乃

いきなりに「あなたの好きな句は」ときかれても、とっさに返答も出来ませんし、まして、新年吟となるとなおさらです。しかしさういかに私の場合はいつからともなくこの霞乃先生の句が頭の中にキチンと坐っています。

一鉢の盆栽からもこんな名句が生れます。川柳人たるものは、どんな些細なものにでもするどい観察の眼と愛情のまなざしをそそがねばならないと思います。

品位もあり、ちょっぴりユーモアもあり、短冊にびつたりの名吟です。

観察プラス、愛情プラス、技巧プラス、女らしさ……女流川柳家の前途も洋々たるものです。苦し

さの中に楽しさがある。秀吟の中にも女らしさのある句を私は作りたい……



たのしい歳

新春

児島与呂志

屠蘇さますための初詣では云わず 春果

幸先は よいぞ今年は僕の 干支 淡舟

新しい年を迎えまして、これからも川柳を一すじに愛しつづけて家中を笑いの渦に巻き込んで、行くこうと思っています。

酒の好きな私は正月の来るのがたのしいと言えは嘘になるかも知れません。公休日には朝昼晩と酒を飲むのが常ですから、屠蘇など

と名を変えてまで気兼ねする必要がありませんからね。けれど屠蘇の味は又別ですからね。

新しく年改まる事の喜びは年令の老いることを喜びにし忘れさせる魅力を持っている。

片言の孫に芽出度いお元旦

生々庵

今年から孫もお屠蘇の座に加え 小石

四十路もう峠を越した屠蘇の味 春果

又一つ歳を取らんなんと言いつつも、たのしみは子供だけの喜びやと思いが、やはり一年の新らしくなる屠蘇を祝い、目の縁を赤らめて子等のはしやぐ声に和しつつ胸ふくらむ希望を自由に描くのがたのしくうれしいのではないだろうか。

初夢を炬燵の中で笑い合ひ

胡蝶

正月の出入にあきれ返って 久米雄

寝

ケネデイも僕もおやおや四

十代

東岸

正月とはやはり文句なしに芽出度いと思う。俳句調のような美しい句よりは喜びのまま家庭的の近況を知らせるような新年吟が好きで私である。

末っ子のたもとに妻がつき

まとい

与呂志

餅焼く手食べ盛りをば笑い合ひ 与呂志

紙額をにかけて心あらたならんと
心掛けてゐる。好きな句というよ
りは座右の銘である。

めでたかり三六五夜酌もう
三太郎

年賀状みんなよい人ばかり
塊人

欲捨てて梅一輪の春の中

東洋樹

年々元旦の盛興が薄れてゆく
も、しきたりが失われただけでは
なく、やはり年のせいかと淋しく
もなる。

元旦の弓ひきしほるところ

薫風子

感うほかなしと此頃悟りけ
り 晃

元旦の朝もよいころしよと
起き 三司

君が代の育ち明治をなつか
しみ 文蝶

せめて元旦だけでもと、自分に
言い聞かせる此の頃である。

いい父でいたいと思う初日
の出 すゝむ

この一句

酒井ひか平

福寿草松にしたがいそろか
しこ 腹乃

私が一番好きな新年吟は誰れ
が何ちゅうてもこの一句やと思
う。

いや腹乃先生の代表的な名句や
からと決しているのではない。

この句を私は、毎正月、書いて
眺めて、そしてこない正月を
味わった、過ぎし日の日本の新年
を想う。

夢よもう一度、そんな甘い夢は
願う可くもないが、数の子のない
現代の正月は味気ない。のんびり
とした翌正月、テレビ正月もいい
が、やはり、厳しい正月の作法
は残されているのではなからう
か。

元旦だ一二の三で跳び起き
ん 豆秋

反対にこの庶民の句に共鳴す
る。

松の正月は、老いて未だ、この
意気で行かねばならぬのである。
柳人の新年吟、年賀はがきを一
枚一枚見る楽しみは格別であ
る。

毛筆の新年吟

傍島静馬

せめて年賀状だけと筆持
たん 静馬

旧作で別に好きな句というわけ
ではない。平生ペンばかり使っ
ているものが、改まって毛筆で書
くのは甚だ臆病なものだが。せめて

新年の賀状ぐらいいは、墨黒黒と毛
筆で書こうという私の実感句であ
る。そして私は数十年米これを実
行している。現在のように、年賀
郵便特別取扱いのなかった古い時

新年宴会 には

あたたかい 鍋料理
すき焼と

もみじの名所

竜田大橋下車

電話竜田一六二

料理は一流値は三流
酌は有芸仲居揃い
竹青の店

代のことだが、父の代筆までやら
され、一字一字丁寧に楷書で、謹
賀新年から宛名まで全部手筆で書
き、それを大晦日の夜十二時過ぎ
に投函したのを覚えてゐる。(一
月一日の消印になるから)

斯様な青少年期からの習慣のせ
いか、現在でも年賀状だけは一々
毛筆で書くことに決めている。尤
も宛先が数百数千もあればこれは
印刷に俟たねばならないが、大体
宅百枚程度に押さえているから出
来たことだ。いまの若い人達はこ
んな時代ズレを笑うかも知れない
が、自分と同じような毛筆書きの
年賀状を貰った時には、なんと

く清々しい気分がさせられるので
ある。

雪を詠んだ

句が好きです

小西雄々

私の住んでいる山陰地方では、
晴れた正月よりも雪の降った方
が、正月気分が出ると言いま
す。それはと正月には雪が降った
ものです。事実、私が小学校の頃
は正月といえは殆んど三、四寸か
ら一尺近くの積雪があり、この雪
を踏んで学校へ行き、四方拝の君
が代を歌ったものですが、近年ど
うした加減か元旦から雪が降るこ
とが稀になり、昔ほど正月気分が
出ないようです。

こうした関係で新年吟は、雪を
詠んだ句が好きです。

元旦は近くの山もうすく雪
法泉子

法泉子氏は、同じ山陰の先輩で
あり、私と同じ心境かも知れませ
ん。

屠蘇をくむ窓には寒い牡丹
雪 雄々

牡丹雪が降れば正月気分は満点
です。それに今年の正月は、大山
に子供とスキーに行く予定に
している、大いに降ってもらいた
いものです。

うまい
安い
便利



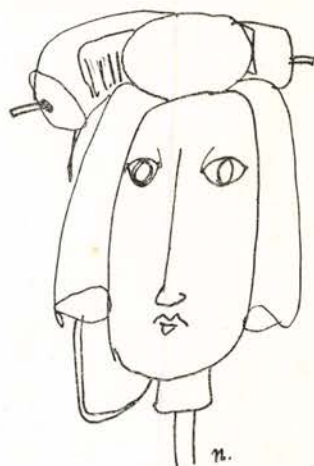
お父さんの牛乳

銘酒

白牡丹
の銚子瓶

攝津酒造株式會社





川柳

名句と難句

麻生路郎

〔四二四〕
十日戎スリは笑が止らない

(満潮)

十日戎の祭りのおびたらしい人出は昔も今も変りはない。警政が厳重になったので昔のように小屋根の上まで押し上げられたり、人死がないようになっただけだ。その代り、混雑にまぎれて、スリの移ぎ場になっている。いくらでもヤスヤスと稼げるので、スリの笑いが止まないと作者の観察である。福をもらいに行つて、福を落とすて来る十日戎を巧みにつかんでいる。

〔四二五〕

一生を行けそもない姉妹都市

(王石)

姉妹都市——何んとなく親しみは感じられるが、考えて見れば、遙かな異国都市との縁組みとあつては、自分の一生では、とてもとても行けそうにもないと多少皮肉を言っているのであろう。

次に姉妹都市について少しく解説をして

おこう。姉妹都市というのは国際的な都市と都市の縁組みで、昭和三十年十二月七日に、長崎市がアメリカのセントポール市と縁組みしたのが皮切りだった。三十二年四月には仙台市とリバーサイド市、五月には岡山市とサンノゼ市、七月には三島市とバサデナ市、八月には京都市とボストン(米)パリ(仏)の両市、九月には倉敷市とサンクトペルテン市(オーストリア)、十月七日には大阪市とサンフランシスコ市(米)とに縁組みが行なわれた。このよう

な国際都市の縁組みは第二次大戦後歐洲からアメリカへ移住した英人が、戦争で荒廃した祖国を救うために始めたもので、日本もこれになつたもの、世界で現在、約六百有余組の都市提携が行なわれているそうだ。

〔四二六〕

教祖もう仮面で生きるほかはなし

(晃)

フトしたことから靈感を感じる女が教祖に祭りあげられた。ところが教祖の生活の単調さにホトホト飽きがきたが、さて外に収入を計る道がない。教祖におさまっていれば、とにかく生活には困らない。そこで教祖の仮面を冠つて、教祖と俗人の二重人格に踏み切ることになり思ひおよんだのであつた。この句、教祖の心のうごきを巧みにつかんでいる。

〔四二七〕

初孫生れる

孫が言わんのはたからおじいちゃん

(文秋)

五十になるか、ならないのに孫が出来た。うれしいやら、はずかしいやらである。孫は可愛いが、おじいちゃんはお免だ。オレはまだ若いんだとは誰もが持つ感想だ。それをどうだハタから、おじいちゃんおじいちゃんと言う、怪しからん話だとファンガイしているのである。若いおじいちゃん

やんの代表的な抗議として面白いではないか。

〔四二八〕

先輩が僕の暮しへ口を出し

(季賛)

僕はまだ若いので、使いよいのか、アツチへやられ、コツチへやられ、いまだにボストが安定しない。妻子を前任教に残して僕は寮住いだ。

「それじゃあ、君、不経済だよ。安サラリで二重生活をするなんて、幾らあつたって足りやあしないだろう。早く妻子を呼びよせることだなア」と、先輩は言う。

イヤ、一々ご尤である。僕もそう思うが、それがそういえないところが、今の世の中なのではなからうか。

〔四二九〕

ニセ札までわたしの家を素通し

(八郎)

ニセ札が出て世間を騒がしている。発見したら三千円に取り替えてくれるとか、ニセ札造りの情報を知らせたら百万円を謝金に出すそうであるが、ワタシのような小ゼニしか扱わない階層には縁遠い話だと詠んだのである。

〔四三〇〕

ボーナスも渡してしもた気のゆる

(多久志)

近ごろは組合が出来て、資本家も楽では

ない。ボーナス攻勢には儲かっても儲からなくとも、何んとかしなければならぬ。

「ようようにして切りぬけた資本家が、グニャリとなった心境は斯うもあろうか。資本家の半面を巧みにとらえている。」

〔四三二〕

紙よりもうすい松茸汁に浮き

(草 右)

吸物のフタを取る。パツと湯気が立つ。中には紙よりも薄い松茸が浮いている。ハハア、近頃は松茸が高い高いといわれているが、これではなアと思ったのである。「これはどうだ」と箸でつまみあげて見せる。

「それでも喰べられたらいい方ですよ」と、妻君にたしなめられたと言うのであろう。家庭風景の一コマをスナップしたものの。

〔四三三〕

碧い眼も混じる京都の縄のれん

(八九寸)

京都は日本の古都として観光外人のあこがれの的であり、又日本を研究したい外人たちにとっては必らず足をとどめる所だ。

この句は庶民階級に直接触れたいため、縄のれんをくぐった外人をスナップしたものだ。

「ワタシ、おでん大好き」

と、怪し気なニッポン語が聞けるのも風情がある。

〔四三四〕

(生 薑)

資本家のアタマは別だ。いつまでも使っているが臨時工である。不景氣風が吹いたら何ん時でも鹹にすることが出来る。解雇手当も涙金で済む。万事がソロバンずくだ。

その間の消息を詠んだ句として面白い。

〔四三五〕

ゲイボーイ人の爽雜物のうち

(一 瓢)

作者はゲイボーイを人間の爽雜物だと観ているが果して、そうであらうか。

大宅壮一氏の解説によると、

通称「ゲイ」と呼ばれている。男色家の対象となる青年のこと。ゲイ・ボーイのたむろする特殊な酒場をゲイ・バーという。ゲイ・ボーイは日本で約百万人と推定され、ゲイ・バーは東京だけでも約四十軒に及んだ、そうである。

〔四三六〕

出世欲持たず困甚だけ強くなり

(季 生)

「どうせワシ等は何ん年勤めようが平だ。」と、割り切っている。

そこで、ヒマさえあれば、盤面にカジリつくことにしている。だから、囲碁だけは強くなったのである。こんなのが、停年になったら基会所を開くのであろう。

〔四三七〕

留守事は妻の推理に恐れいり

(愛 鳩)

映画から戻った妻が、

「あら、お客さんだったのネ」

「ウム」

「若い女の方でしょう」

「それがどうして判る」

「だって、そりゃ判りますわよ。座ぶとんがキツチリ二つに折ってあるし、それに若い女の方の使う香水の匂いが、まだ残っているんですよ……」

「それだけかね」

「まだあるわよ。座布団にホラこんなに長い髪の毛が落ちていたのが、いい証拠ですわ。どうですズバリでしょう。」

こんな妻君にかかつては動きがとれぬところか。

〔四三八〕

張り板のように腐らぬ板もあり

(梅 志)

薄汚れた張り板を眺めて驚異の眼をみはったのである。それは母の時代、イヤおばあさんの時代に使われていたものかも知れない。

祖母が逝き、母が亡くなって幾年経つとか。それなのに張り板は

くちはてようともしないのである。人間との対比がこの句によって考えさされるではないか。

曾ては衣類をほどこいて、糊張りにするので、家庭の必需品の一つに数えられたものだが、今日では張り板といっても知らぬ人さえない。手拭をねえさん冠りにして、せつせと糊張り

をしている婦人の姿などはなつかしいものだが、今はそうした姿はてんで見かけない。

一反の糊張りには四枚の張り板が要ったそう。その板は長方形で、縦が鯨尺の五尺位で横巾が一尺二寸位、厚みが五分位あった。それを陽当りのいい塀や壁にもたせて使用したものだ。

〔四三九〕

帰郷して雪隠詰めのうちに死ぬ

(清 生)

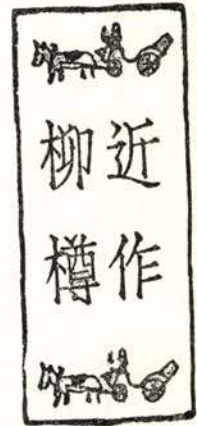
定年退職、何かしようにも、今までの仕事ではこれという商売にも取っつけぬ。勢い郷里へ帰り、そこでなすこともなく枯木のような余生を送り、とうとう死んでしまったのを「雪隠詰めのうちに死ぬ」と諷したのである。皮肉な句だ。雪隠詰めの将棋用語で、下手な将棋さしが、逃げまくって盤の隅で詰められるのをいうのである。



謹賀新年



ビールは
アサヒ



麻生路郎選
北川春巢選

出雪大社参拝 一句

柏手がみな寄り添うている 出雲 枚方市 宮川 珠笑

けだものに似る空席を見つけた目 同

上棟の今宵忘れん 資金繰り 同

介抱をさせておくれと酌ぎつつけ 同

妻の香と一緒に新婚 出社する 同

新妻に犬もなついてくれるなり 同

母逝く 六句

お浄土の父にことづけ聞かず逝く 竹原市 山内 静水

納棺へあまりに母の小さすぎ 同

大往生 疊の上で絶え給う 同

何はともあれ極道がもどつて来 同

初七日をうつらうつらと迎えたり 同

あの日から夫婦で下手な経もあげ 同

プロレスにスリル感じる女にて 鳥取県 鈴木村 諷子

人情も鱈の切りよも 紙に似て 同

ボロ着れば心もやはりボロを着て 同

功成り名遂げて酒止められる 同

ウエディングケーキを切った手 せなぐり 高知市 須藤 俊江

山茶花が好き露路の奥に住み 同

母のすね細すぎ再婚すすめる子 同

香林さんをしのぶ

手をひいて紅葉かきわけゆくよ みじ 同

元氣なくなつて仏事によく気付き 青森県 岩淵 一星

失業保険様様バチンコ屋は 満員 同

カタカナに弱くそろそろ子に任せ 同

孫に気付かれて嬉しい忘れ物 同

師走の街窓から見下ろし管理職 仙台市 平野 光道

柿熟れて子ら着ぶくれて村貧し 同

謹賀新春

富士野鞍馬

東京都港区麻布宮下
町三〇番地の二

阿部佐保蘭

東京都中野区
鷺宮一ノ八野四区

金泉萬楽

大阪市東淀川区淡路
本町二ノ六八九

橋本写真材料商

大阪市東住吉区平野
西之町八三

菊沢小松園

大阪市阿倍野区王子
町三ノ三四
電話 六六四四番

八木摩太郎
八木徳子

堺市九周町東二丁山之口筋
電話 七二三五番



豚に食わす林檎から選り林檎酒

同

コマーシャル師走の家計かきみど

同

ガーベラの赤き娼婦見るごとし 員塚市

千石 快人

呵々大笑お口の悪い大僧正

同

原爆後遺症で近く血の逆流

同

算盤をはじいて死人の世話をやき

同

月末は末子の貯金出して食べ 大阪市

福富 隆子

問題の酒をお医者はおかしくれ

同

酒飲んで薬をのんで酒飲んで

同

ぞんざいに親しい同士の窓と窓

同

迷い子へやき芋もたすママボリス 大阪市

堀 風仙洞

先生が先生を呼ぶ手術室

同

身をまかしてからのなはし がしがいかけ

同

戦争も映画にすれば面白い 豊中市

稲増 久雄

新だたみ横になったり坐ったり

同

欲求の不満ツイストになる若さ

同

話とは別に視線は市場籠 羽曳野市

古川 静波

情熱を趣味に注いで左遷され

同

台風のように院長診て帰り

同

一〇〇キロが出せる道路に田 ちうがし 兵庫県

遠山 可住

血圧を案じ恩給に手がとどき

同

弱い子がありにんじんの種をまく

同

トンブクがやっぱり母の風邪に きき 竹原市

杉原 愛鳩

弁天像勿体ないが曲線美

同

一票がアホらしゅうなる裏ばなし

同

長崎を訪ねて 一句

鐘の鳴る丘のクルスも倅せそう 松江市

内藤 喜夫

大山を訪ねて 二句

大山は紅葉下界は赤い旗

同

大山のカラ松恋の顔をなで

同

禁煙実行子の小遣いをあげてやり 石川県

前田百万石

女医と云う名のおばはんにな たにこうち

同

景色よりガイドの顔の方がよし

同

開米の買える身分が値上げする 大阪市

山田 蛙水

親分を社長と呼ぶす上り竜

同

また一人腹に入れてる七五三

同

座布団も敷かずには喋ること止めず 出雲市

中川 晃男

おだてには乗りませんよとお こころえ

同

謹賀新春

吉田圭井堂

堺市浜寺昭和町一丁目三〇
電報 ⑥三〇五四番

川柳江戸吟社

小谷 源氏

東京都江戸川区一色町七二〇
電話(六五七)三二二番

川 大聖寺支部

石川県加賀市大聖寺町
永町五〇

野村 味平方

あけまして
おめでとうございます

竹原川柳会

竹原局区内 一同

田垣 方大

倉敷市水島寿町
三丁目三十一

真鍋 一瓢

清水 望峰



冷静に同情してる他人の目

同

バカみたい人前でガムかんで居り

齋藤たけお

腰の低い人で話が長うなり

同

恩給日めくりに印つけておき

同

神経痛病床にて

エバーソフトよりやわらかく愛の手よ

河原みのる

デカンショの本場や半としねてこそ

同

百までも生きろか「ヨガ」を買い

同

食堂車富士へビールの満を引く

水宗 宗義

秋祭り飲まない客に氣を使い

同

養つてやる役人にベコベコし

同

貧富の差つけぬ初日へ掌をあわせ

坂井 秀夫

お元日ママもハイハイ返事する

同

こう嘘はつくもの暮がおしせまり

同

敵弾を乗り越えて来て死ぬ輪禍

常岡 孝風

共産党を嫌う労働者のくせに

同

夜の祈り創価学会とは見えす

同

アメリカが近い航空便が着き

吉田 俊和

タクシーの運ちゃんにダウの話

同

カネかけているとはウマの知

同

還暦を迎えて

節くれた手で還暦は孫をだき

根上 杏花

職安に籍有り人生つかれ果て

同

もう除夜の鐘かと独り燭をつけ

嶋野ひ呂し

神替える花嫁さんではめられる

同

生活の設計おもちゃのような家

岡崎 祥月

豊作の村デラーの音楽し

同

基地となる噂へ村も活気づき

南 伝一

スピード違反すなおになれど志

同

楽団が余興に移る音をたて

都倉 求女

日溜りに居たそうに落葉が廻つて

同

職安に名前が知れて職がなし

小谷 仙山

啄木の詩集を出すも風邪の床

同

日溜りに似た暖かさドヤに住み

安藤 柱仙

けにかき押されチャンスをもた逃がし

同

モデル住宅せめて夢など見て戻り

小林 孝正

瘦せたいと云う娘の口は動きずめ

同

どたん場になって口下手よく喋り

脇坂 笑顔

甘い顔すればデイトを申込み

同

取入れへ有給休暇親も子も

川端東雲楼

田村 藤波

岡山県英田郡美作町湯郷五二

工藤 甲吉

青森市金沢二〇ノ四九

石井 夏生

香川県三豊郡高瀬町

(ABC順)

坂東 若芽

伊達 堰子

不二田 一三夫

今西 生薑

金井 文秋

加藤 繁雄

河井 庸佑

木村 十悟

菊沢 小松園

久米 奈良子

松江 梅里

宮尾 あいき

小川 恒明

新川 博也

辻川 喜仙

支 部 野 倍 阿 社 誌 柳 川

事務所 大阪市阿倍野区松崎町3の10 電話33935 (松江梅里方)



外孫はあかん食べたたら去ぬという

同

グループでスキーの旅の貯金帳

同

遠慮なくぐちこぼし合い日向ぼこ

赤池 五朗

七三の枚敷に眩い描き眉毛

大久保 和三郎

嘘一つ云えず停年来てしまい

同

存在を示す賛成派手に揚げ

同

小姑になった目で見える姉の客

福井与太郎

パチンコの根性がほしい農作業

出原 真奇

秋の宿追いつめられた恋と居る

同

横綱がビデオテープで又転び

同

仲人の口に無かった競馬趣味

岡本紀太呂

たいそうな声で鶏一つ生み

吉田 隆史

PTA夕餉のおかずの胸算用

同

安米節お盆で芸妓招かれる

同

買わない 気自動車ショーへ顔を出し

大谷 惇雄

ちと派手やわと妹の下心

山川 勝子

手紙より趣味の切手を大事がり

同

手術後は入歯の掃除も人にさせ

同

遠慮なく友の手土産取って置き

三宅 ろ亭

首が減る合併きたなく反対し

谷本鈍愚坊

ご満悦ボスにも笑うことがあり

同

合併反対売名も居り野次も居り

同

長唄の会日の短かいのも知らず

里田一十

七五三五つの娘にも着せてやり

川口 弘村

パチンコで気が晴れるなら安い

同

妻の友来て御挨拶強いられる

同

けなしてた奴に相談持ち込まれ

伊丹柳瓢子

菊活けてさて文化の日を寐るとき

宮尾あいき

録勉でベッドおくれをとるもどし

同

女の子沢山産んで馬鹿らしく

同

風邪こじれせんじ薬をなつかしむ

阪本 時二

豊繁期自然の美など忘れられ

近藤 昭夫

アカハタに仏も顔を横に向け

同

親戚の端に市会に立つがおり

同

スタートをやり直す気で酒をやめ

大洲大八洲

体育のほかに脳育忘れてた

小川 静観堂

地酒にも慣れた左遷の年の暮

同

癌ブーム癌で博士が次々と

同

栄転の名刺課長の字が目立ち

藤富 淀月

風呂敷をお借りしてまで貰いもの

野口卯之助

西 森 花 村

木 村 匡 利

水 洞 余

躬 和 子

恭 三

夫 共 子

倬 三

西 森 花 村

坂 田 東 洋 男

志 水 礼 司

早 川 清 生

平 田 三 十 郎

小 島 孝 夫

中 村 瑞 歩

木 村 水 洞

大阪市東淀川区十八条町一丁目二

川 雜 淀 川 支 部

大阪市東淀川区三國本町
三ノ三二(北三國住宅二号)

大阪市東淀川区十八
条町一丁目二



馬鹿にされそうではこの稽古す

同

髪と靴光って尖る心持つ

田中 浪満

たこ焼が売れて故郷の土踏まず

同

和服着て飲めば課長の顔でなし

景山 綾美

だまっても心が通う酒うまし

同

虫干しに無理算段も吊ってあり

水粉 千翁

お手本に似てない個性ほめてやり

同

金持って来いと十二月のネオン

藤原 秋月

紙と木の家で放火魔におびえ

同

洗剤の売りつけだった講習会

越智 一水

菊の花咲かせたままに栄転し

同

農作の村嫁く話くる話

岡崎 雪美

球審は手品のようにマリを出し

山田松太郎

教養の程度あらわす誤字脱字

末田 晃康

シャンブーのいらぬ頭に頼られる

大垣たもつ

シャツで掃除血圧忘れてる

万代句念坊

玄関番ホテルに素敵ジャイアント

高木繁太郎

失恋が今の名士に仕立てあげ

佐内 隆子

あの社長冠婚葬祭とゴルフだけ

和田 旋鳳

手頃だともらった嫁に敷かれてい

松高 秀峰

紫宸殿を背に一家中勢揃い

河内長野市

森本黒天子

リフト乗る善男善女の月詣り

西宮市

沖吉 照児

船室はマージャン台が占領し

大阪市

西本 保夫

大学祭

パン喰いで幕があけたる大学祭

西宮市

鵜飼 鮎子

酒たばこおっぴらになる十五日

玉島市

井上 旭峯

医者嫌いそれが唯一の父自慢

愛媛県

村上 石峰

公僕を世論の鞭でちとたたき

マカベ

上田 紅溪

満二十才の誕生日を迎えて

頭で孝行口で毒づき

大阪市

山崎佳津子

六十の手習何から始めよか

姫路市

隠岐 不酔

路郎師をお訪ねして

お声だけ聞くと文化の有難さ

金沢市

河合 卯翁

法名は覚えられない名に変わり

京都市

小黒 王石

振分けもなく人生の一人旅

福岡市

小田 無限

柿一つ取り残してる秋もよし

豊中市

田中 敏行

ご勇退実は汚職もあつてやめ

和歌山県

岩本 荷水

菊人形きれいな袖に水をかけ

京都市

西村句楽坊

足らぬ罌基冒險知って打込みぬ

京都府

金振 遠声

屈託のない顔で豚買われてく

若松市

住吉 貞坊

川維米子支部

松露川柳会

米子市富士見町一三五小西方

秋月 宏方

和歌山市今福東ノ町二二八

長野 文庫

今治市港町八丁目

奥津 啓一朗

東京都目黒区芳窪町四一

傍島 静馬

神戸市東灘区

木村 千容

岡山県倉敷市新川町千宅番地

米沢 曉明

愛媛県大洲市常盤町九一番地

林 昌男

大阪府泉北郡忠岡町二二九北住宅三八号

渡辺 曉童

愛媛県越智郡吉海町仁江

杉谷 湖山

鳥取市職人町

横山 一声

岡山県和気郡吉永町吉水一四〇

室井 八九寸

京都市北区紫野東連台町九

横紫 光

愛媛県周桑郡壬生川町大曲・富士紡水源地宅

母子色道指南

東野大八



玉木潤一郎という愉快な男がいる。東映のプロデュサーで、よく東映映画のタイトルルでお眼にかかる。

もう七十近いお歳だが、赤いセーターに黄色い背広を着用して、五尺そこそこの小さい身軀でとてつもない大きな声でしゃべりたてる。僕とは酒の上でよく気が合ひゴキゲンとなるとたちまちワイ談をおっはじめる。一度ウ銅の舟の中でそれが昂じて手近かのさる奥様に抱きついてキスし、気の強いその奥様から危く水の中へはうり込まれそうになったことがある。

「君が川柳ならオレは俳句でも有名だ。一丁競吟という」
なんていうが俳句というより狂俳のマガイものみたいなしろものなにおそれ入った。

先日モフリと岐阜にやってきた。木内三枝子というすばらしい美人女優と河原崎長一郎というのを伴っている。河原崎君は長十郎さんの息子さんで、サラリとした感じのいい好青年だ。別びんさん

の方はいま売り出しの若手時代劇女優だそうだが、キワどい玉潤一流のワイ談にも柳眉滞りなくゆう然とサカズキを手にしているのにはおどろいた。

「この木内君は全国から千人集ったニューフェイスの中でただ一人生き残ったスターで、その女優根性はこのキレイな顔に似合わずホトギスの如く強烈だね」

と玉潤さん大いに賞揚しておいて、こんなトクダネがあると語り出した。

「天下の名女優山田五十鈴ね、この人がまだ十六の若かりし日のことだよ、木内君もよくきいておいて欲しいな」

これが前おきである。以下はそのトクダネとやらしい話のかいつまんだところである。

山田五十鈴の映画初出演は、沢田清主演の「観を越えて」の舞妓役だった。ところがこのシャシンをみて、五十鈴のお母さんがお前の演った舞妓は本ものの舞妓じゃない。一つわてがその見本をみせてあげるからよく観察し

ときゃ、と言って日を定め、娘のための芸妓の真打を演習することになったんや。見本にしても相手の男がいる。その男にわしと定った。

五十鈴のこのお母さんという人は、かつて大阪の三名妓の一人とつねつねわしがむかしの彼女の恋人に似てるとか言われて、その因縁もあって引っぱり出されたわけなんや。

さて、京都木屋町のさる料亭で娘に見せるための秘伝伝授の一席がやってきた。

「ええか、芸妓がこれと思うお人をどのようにカンラクさせるか、その手練手管の所作事的一幕やで、わてをおカキさんと思わずよく見ておきや」

と前置きして、わしを床の囀正面へ坐らせ、少し離れて五十鈴さんを控えさせ、いよいよ実演開始さ。

わしと五十鈴さんと二人で、十分ぐらい坐っていた。すでにわき膳つきの酒席がわしの前にある。その膳の酒をチビチビやっていると、正面のフスマがスーとあいた。思わずみるとさすがのわしもギョツとなった。

そこには一月の寒い最中やというのに、ひがのこの長じゅばん一枚の、みるからに艶かしい妓がきれいな三つ指をつけて頭を下げている。そしてスーッと入ってくるなり、びたりとわしの前に坐って

「どうぞお一つ……」

とハイ洗のサカズキをとってさし出した。こんなところが正念場で、サカズキを渡す瞬間チリとわしに流し目だ。その流しっ方のうまいことと言ったら、さすがのわしもゾクゾクときたね。

うん、とか、おうとかいいながらわしがそのさし出されたサカズキを手にとろうとしたら、その小さい奴がビクともしない。それもそのはず、サカズキの底の、俗にいとじりというところを親指と中指ではさんでいるからだ。ハッと

なって相手の顔を見るのを、相手がカチッとうけて、さっとサカズキが離れた、と同時にまたチラリ、とそのタイミングの見事なことといったら……。

それから二人がつぎの間なる寝室へ入るんだが、その部屋の中の所作、振舞いのツボに入ったソツのなき、くわしいことをいうとし

かられるからかつ愛するがね、その二人の様子を音もなく五十鈴さんが移動してはじつと水ももらさ

・謹賀新春・
小児科・沢田医院
沢田四郎作
大阪市西成区玉田
本通り一ノ三
電話(六二)元三

ぬような顔で観察してるんだね。
わしはいまでもそのときの五十鈴さんの顔をありありと思いうかべるね、まだ十六の小娘が男女のキワドイやりとりをまたたきもせ

ずみにつめてるんだ。

今日の大女優山田五十鈴の名声を思うたびに、わしは自らを娘のために捨てて尽くしたその母の姿を眼にうかべるね。寒い一月の座敷のたたみの上で、うすもの一つになつて懸命だったその一人の女の姿を……。

玉潤さんの話はどうやらこれで終わった、彼が席をはずした機会をみて、僕は木内嬢にこの話の感想をきいてみたら、彼女答えていうよう。

「こんな母を持つことは人間として果して幸せでしょうか、不幸でしょうか、お話の半分ごろからそればかり考えていました」

なるほど、と一応こちらはうなずいておいて

「それは芸妓を母にもったという人間の境遇からくる疑いなんです、か、それとも？」

「いえ、そんなことではないんです。いくら演技とはいえ、血をわけた娘にそんな男女のキワドイところまでみせる母、みせてもらいうという娘の、そういう点がわたしにはわからない」

ところでおじさまは一体どうお考えですか、と僕の顔をうかがうようにみた。

僕は教育者ではないので即答を避けることにしたが、時の流れとそれから人間社会をもつてして、その問題についての批判は人まちまちにちがいない。
ただ玉潤さんが座にもどってこうつけ加えてくれたのでオチがついた。
「そのお母さん、晩年は精神病院だったそうだよ」

添削の実際に

— 特集 —

常に新人の句に接して活動されている
四氏に、ある句の添削の範例を示してい
ただいた。(編集局)

ついて



一字訂正、一字挿入の程度

堀 口 堉 人

添削は推敲ではない。ましてや
改作ではない。一字訂正、一字挿
入の程度である。私は他人の作品
に対して、誤字脱字の明らかな場
合以外にはめったに添削をやらな
い。さらに自信がないからであ
る。

貧しさえ虫にぎやかに鳴い
てくれ

という投句があった。この「え」
は「へ」が正しい。新かなづか
い、になつてから、すべてを発音
通りと解して、こんな場合「え」
と書く人も多くなつたが、新かな
づかい、と雖ども一助詞の、を、
は、へ、は従来通りとなつてい
る。そうである。しかし、私は、添削
せずに、そのまま活字にした。
え、あ、へ、の使い方に、さつぱ
り自信がないのみならず、この場
合「貧しさに」とする方がよいの
ではないかと、疑問をもつたから
である。

「へ」向つて
「に」対して
「へ」対して

貧しさ故「に」

作者は、どんなつもりで、「え」
を使用したのか、何のつもりもな
く無難作に「え」としたのか、そ

れがわからない。それがわからな
ければ、添削のつもりが改作にな
るおそれがある。それでやめたの
である。

私にとって、旧かなづかい、に
は未熟であり、新かなづかい、は
不消化である。だから、投句中旧
いものは旧いように、新しいもの
は新しいように、そのままとし
ている。一句の中に新旧両様が混
っている作品は、どちらかに統一す
べきであるが、十七字調の場合、
そのどちらに統一すべきかが、中
々むづかしい。それに、新かなづ
かい、の場合でも——文語は旧か
なづかいのままという約束が忘
れられている場合もあるからであ
る。かなづかい、は作者から(何
の抵抗も感ぜず)自然に流れ出
るようにならなければならぬとい
思う。我々明治に生れたものは、
旧かなづかい、にあまり抵抗を感
じていなかったにもかかわらず、
敢てそれに抵抗を感じさせたもの
は、新かなづかい、である。よつ
て、生じた混乱時代である。私
は、混乱を混乱として、そのまま
受容れているつもりである。
「鳴」があり、「泣」があり
「啼」があり、「咽」があり、

「歎」があり「歎」がある。調べ
てみればまだまだあるかもしれない。
この場合、どれを使用するの
が一番正しいか。パール・バック
の女史の小説「大地」によれば、涙
の出し方と、声の出し方によつ
て「なく」の漢字は違ふそうであ
る。なるほど、しのびなき、むせ
びなき、くやしなき、など、いろ
いろあるから、文字の国では、そ
んな区別がある筈である。ところ
が私はそれを知らない。

虫は涙を出さない。と思つてい
る。ほんとに出さないか、どうか
「昆虫記」でも読んで勉強しなけ
ればならないが、ここでは、出さ
ないと仮定しておかなければ都合
がわるい。そこで、涙を出さなけ
れば「鳴」でよろしかろうと思わ
れる。しかし、この句の場合、人
間の貧しさと虫の鳴声とは融け合
っているのであるから、人間様の
方は涙を出しているかもしれない。
そして、虫の方も涙を出してい
るかもしれない。若しそうとすれ
ば「鳴」でよいかどうか問題であ
る。

川 柳 雑 誌 社 京 都 支 部

謹 賀 新 春

室町寺ノ内上ル
井ノ下晴芽

全
井ノ下秀徒

深草錦泰町

岩崎正夫

全
相模町

大鶴喜由

喜屋町大宮西入

大久保和三郎

相国寺北門前

田中千潮

全

田中烏雀

醍醐日出ヶ丘

竹松九角

山科厨子奥

小林亀一

全
西野山

平井絵丘

全
助修寺

平岩司郎

小山東大野町

本儀親生

これは「藝」ではない。「老子道徳経」の第十六章に、夫物芸芸（それものうんうんたる）とあり、芸芸、とは、草木の茂りて盛なる貌、物の繁く多きをいう、とは、簡野道明の解説である。「老子」は私の愛読書なるが故に、たまたま気のついたことであるが、これでは、「虫」と「蟲」とは同じ「むし」であるが、もう一度調べてみなければなるまい。ただの虫でなかったら大変である。本文の表題「添削の実際」に就いては「添削をしない実例に就いて」と、添削されなければならぬ。

（川柳文学社主幹）

選句という名で見る添削

布部 幸男

名も知らない、その人も知らない。名は知っているが会ったことはない。そんな人たちの作品を「選句」という名で見ている。むつかしい作句理念も生活意義も、それを「選者のことば」とするには条件が伴わない。

川柳の添削という仕事は、結局のところ選者のもっている「川柳」の尺度に当てはめて、十七文字に表現された「作品」を見たり、発掘したり、失望したりする仕事なのである。

その意味で川柳誌への投句家には一応作品としての基礎が心理的にもできていくわけである。と、私は見ている。たとえば私は過去六十七カ月にわたって柳誌「平安」の川柳教室を担当してきたがもう五六回もの連続した投句をみると、作家それ自体の年令や、生

活環境がおのずから作品の上に表現されてきていて、私の持論である「句を通じてその人を見る」という線にまでできてしまう。

その点からいうと、柳誌以外の「川柳壇」の選はむつかしいしやりにくい。たとえば私がもう十二年余もつづけている京都府警察本部の機関誌「平安」の川柳欄のことである。この雑誌は府下全部の警察官とその関係者が購読させられるべきもので、おそらく七千部は出ているだろう。

その「新年吟」の選稿が手許にある。

地理教示新米駐在地図の上

（原句）

を見ると、いかにも新市街（府下向日町）の駐在所風景が出ていし、そこに動めた巡査の存在が浮び上がる。私はそれを

新米の駐在地図の上に住み

と宋を入れて発表してもらった。

駐在だけで警察官を描くのは無理なようだが「府警の機関誌」であるという先入感がある。また

手術台外科医の言葉やさしくし

（原句）

は句主の説明があり細々と手術の経過を示しているが、それはご本人の体験であろうが、選者としては、その二時間の経過も外科医とのやりとりも「川柳としては」という観点から見ることになる。そこで

メスをもつ外科医やさしい手術

台

と平凡な描写にしてしまわねばならぬ。作者の意見は「平凡」でないけれど、選者としてはこれを

酒



清

灘・魚崎

大塚合名会社醸

「平凡」という。これはその句に作者自身の個性が住んでいないという表現につながる問題にまで発

展することである。

警察官家族の句におもしろいものがある。

国語よりテレビの文句まる

（原句）

なるほどその通りで、世相を映すという川柳の行き方なのであらう。

国語よりコマアシャルの字よく

覚え

と添削しておいたが、私が「伊勢柳園」十二月に「世相句評」として発表した句に

コマアシャルソングがうまい幼稚園

がある。国語などと聞くなるよりソングの方が手っとり早くていいと思う。

私の秘密も淋しあき去りて

（原句）

もちろん藤原あき女のことである。しかし考えてみると、私の秘密というテレビ番組を離れる人がもしありとすれば、この「あき」は「秋」になりにかねない。前書きがないからこれは因るのである。そこで

私の秘密も藤原あきがなく淋しとしておいた。作句者ご本人の気持ちの代弁である。さらにおもしろいがある。

飲んでいて飲んでないのが

警察官

（原句）

である。これは京都府警の監察官室と書いてあるから、おそらく本当の句であり、見聞の所産であろう。この作家「今村とし子」さん

高峰 柳児

長野県須坂市太子町

長谷川 鮮山

名古屋市中区米田町一六
電話（54）九〇四五番

尼 緑之助

島根県出雲市高松町
松寄下

長野元一（号・井魁）

山口県防府市大字西佐波
令字幸地一三一六ノ一六

木山 遠二

笠岡市山口

虹川柳倶楽部

新岡 回天子

佐賀県唐津市新興町

木村 涼人

青森県尾上町

桜川 不水

下関市東大坪四町
一八ノ一一

野村 岬月

出雲市若葉町

木次支部

藤井 明朗

島根県大原郡木次町

林野 甍光

呉市吉浦中町一丁目

佐野 白水

大阪市阿倍野区三明町二ノ一
三電（771）一一六九番

は毎句投句されていてなかなか鋭い川柳眼をもっているが、こうズバリでは選者の方が一步退く気持ち。私は

飲んでいて飲んではいない警察官

と、すこしく句にゆとりをもたせて発表しておいた。たった四文字のことだが比重が効果は微妙である。

保護センター朝での顔はみな紳士 (原句)

京都堀川警察署勤務の人の作である。体験の句といっても見た側の本当のスケッチであろう。酒のみ天国への一矢である。

保護センターみんな紳士の朝の顔

として「朝の紳士」に対して人間としての威厳を添えたのは選者の駄足であろうか。



自己を詠う精神

添削作品を例として

大野風柳

制帽のあとくつきりと夏が過ぎ (原句)

これは新潟県警本部から発行されている「護光川柳」に寄せられた作品である。私の主張する「自己を詠う」精神が、投句者である警察官に徹底されてきたことはよ

こんなことに関してはいくらでも書くことがある。「川柳の添削の実際」という編集者の註文は、もっと高度な作品についてのことであろうかもしれないけれど、川柳誌上でのギブ・アンド・テイク的な句評から出発した添削論議や理論争的な作句批判を離れて、これは「ほんとうにあること」であり、川柳という文芸を極めて素朴に、極めて純真に受けとっている人たちの「作品を添削」した話である。

短歌・俳句、詩などといっしょに毎月毎月たぐさんの「警察官」やその家族の人たちが、「川柳」という名のもとに作品をたぐさん寄せてもらうこと、それ自体に私は選句選評のよろこびを味わっている。

(平安川柳社)

こうすれば警官の制帽の硬直さと、その俊敏な動きを描き出すことが出来る。作者の意図と全く違ったものになってしまったが、添削は必ずしも、助詞の訂正や、上五と下五の交換だけのものではない。ましてこの句のように、わずかに三字添削で足りる場合は、大いに作者の狙いまでも是正してやることを私は常にこころみている。

思考力失せて獄中をねむるわれ (原句)

この句は、前の句とがらり変って、新潟刑務所で発行している(囚人だけの作品)「すがた川柳」に投じられた作品である。

「自己を詠う」精神がここでもはつきりと表現され、たとい囚人であろうと堂々と詠うようになってきたことは実に尊いと思っっている。さてこの句の「思考力失せて」の解釈が問題である。獄中にいて、すべてをあきらめ、望みを絶つてのあげくだと、私はとりたてない。ましてや川柳作品として詠いあげられる場合は、逆に態度に気力あふれるものを望みたいのである。無気力からくる「思考力失せて」ではないとすれば、何か。私の十数年前の旧作に「あきらめたから漂流者寝るとする」というのがある。これなども単にあきらめきったのではなく、今寝なければならぬ。いや、眠られるだけの余裕を詠いたかったのである。だから私はこの句を次のように添削した。

した。

思考力失せて獄の夜ねむるのみ

原句の「われ」は不要だから削除した。「獄の夜」と表現し、ことさらに「夜」と「ねむる」をダブルさせたのは、テクニクとして受けとっていただきたい。「夜」はねむるべく人間に与えられたものののである。

重患の頼る心を受けとめる (原句)

この句は、やはり私が指導している、国立有明療養所発行「川柳カラー」に投じられた句である。私は完璧な作品だと思う。座五の「受けとめる」という句のまとも方も見事であるし、更に重患者の心のさびしさをおしはかることが出来る。ところが別の作者の次の句を発見して、私は迷ってしまった。つまりその句は

重患の人なつつこさを避けるまい (原句)

まさに類想句である。私は後の句が、前の句と比較して作者の心がムキ出しになっているだけに、魅力を感じた。表現にキドリが見えないのである。この二句を並べて感じたことは、ともすると後の句が投句された場合、選者や指導者が、そのままの表現ではないにしろ、前の句に似た型に添削してしまうかということである。ここに大きい問題があると思う。つまり添削とは、句の、作品の、スタイルを揃えるだけに終ってはいないか。もしもそうだとすると、ナ

後藤梅志

洋酒 食品 写真

日本火災代理店

北区梅ヶ枝町宇治ビル別館

電話(三六二)〇九四六番

西成区玉出町通り一ノ二

賀正

石居高志

東京都小平市美園町二八三

メガトンの

重ね雲たと鏡餅

川岡霊眼子

諫早市天満町一二九七

富柳会一同

富田林市民館内

石倉旅風

大阪市西成区松通り一ノ八

西川晃

大阪市西成区東入舟町二

那谷光郎

石川県加賀市大聖寺荒町

マの作者の心を無惨にも打ちくだき、既製品としての川柳の型に押しこむ弊害を、あえて選者がやっていることになるのだ。このとこ

(新鴻・柳都川柳社主幹)

添削の実際例

添削した句は作者の句ではない



清水白柳

句が生き生きと輝いて見えるのはその表現が句意にびつたりとマッチしているからであると思う。

どんなに素晴らしい着想であつても、それを現わす表現方法が拙ければ充分に句意を伝えることが出来ないわけである。

選者が句意を生かすために表現方法に手を加えるのが添削であるが、私はなるべく添削することを避けているのである。それは添削をした句が句主の作意と違ったものになる場合が多いからであり、また、句そのものが素材だけで添削しようにも手のつけようがない時もあるからである。添削した句がよくなくてもそれは最早作者の句ではなく、添削した選者の型になつてしまふように考えるので、極く初心の方の参考になる程度の添削だけに止めているのである。

今月の入門講座への投句の中から二三実例をあげさせて頂くことにする。

ろを選者であるべき指導者自身から反省してゆかねばなるまい。

自信でき仏が鬼に心かえ

(T)

句意は商売が何かでぼつぼつ自信が持てるようになってきたので今迄のような仏心では儲けられないから鬼のような心になって儲けなければいけないと心を入れかえたというのであろうと思つたが、仏が鬼にという省略ではそこまで判つてもらえないと思う。そこで仏が鬼にという語を含ませ

商法を替える自信が出来てきたとして見たが、原句にまだこだわっているようで下五文字がまだすつきりしない。出来てきたのを湧いてくる、とするとうなるだろう。

商法を替える自信が湧いてくるとなつて作意も変らないのではなにかと思う。

最初のはアメであつたと覺らされ
(F)
この句は二度目からは手ひどく

やられたので自信がなくなつたというところであらうと思つたが、その手ひどくやられたことが何であつたかも知れない。『驚られされ』は『さとられ』と読むのだが、これもいけない。そこでこの句を一度棚上げにして、この句意をそのままにもつと具体的なものにすることにしたらどうなるだろう。二度目からは手ひどくやられたので、自信がぐらついたのだから、それをそのまま上五文字に現わし、そして手ひどくやられた事柄を具体的に、『損つづき』と現わしてみた。

ぐらついた自信それから損つづき

としてはどうであらうか。それからという四字には『最初のはアメ』という作者の意思がふくまれていると思う。

自信なし妹の方が先へ嫁き

(H)

姉が自信を失くしたという句意だとすると自信なしと断定した句語が生きていない。初めから姉に自信がなかったの、自信なしと断定したのだとすると、自信がなかったのは姉自身でなくて作者自身が姉に自信を持てなかつた句意になるがそうだろうか。いつもよく言うことだが句に温かみを持たせたい、人間味を持たせたいという点からいって、こうした作意は避けたいものである。そこで作意とは違ふかも知れないが

妹を嫁がせ自信ある態度
自信ある姉妹を先に嫁り
と言うように詠みたいものである。

満更がまだ捨ててあり社長

秘書

(S)

実はこの句の作意に迷つたのである。満更でもない社長秘書がまだ捨ててあるとは何のことだろうか。秘書が女であつて顔や容姿に自信があるのに捨ててあるのは惜しいと言ふのだろうか、持つて廻つた言いまわしなので奥歯にものがはさまつたようで、何ともはがゆいのである。そのものズバリと

誘惑されそうに女秘書見つめられ

自信の発言ドライなれず胸が冷え

(S)

自信があつて発言するのだがドライになり切れないので胸が冷えるという句意だが、胸が冷えという句語は作意の感じとしてこのままでいいと思う。ドライなれずという作意が作者としては中心になつていてと思えるのだが、これを取入れて句にすることがむづかしい。

発言に自信が持てず胸が冷え
とすると作意と逆になつてもう。

ドライな発言自信に満ちているこれでも違うことになる。添削とはむづかしい。結局は作者自身がこうして自身の句を考えてもらふことが一番良いのである。句を推敲するというのが、それなのである。みなさんがそうして句を生かす努力をされることを望みたい。
(本誌入門講座担当)

戸倉普天

(本名 誠 司)

兵庫県水上郡水上町
小野四参式地

久家代 仕男

島根県平田市灘分町
一八二二

岸和田川柳会同人一同
岸和田市宮本町

内藤きさ子

岸和田市上町

高橋幸代

岸和田市野田町一七五

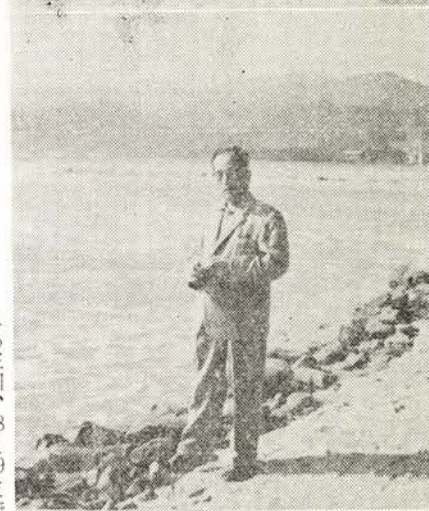
高橋操子

岸和田市野田町一七五

川柳雑誌社

支部 支 造 玉

米柳 一白 出水 西清
支部長 指導 支指



川柳紀行

ふたり どうちゅう

ゆかりのおもかげ

二人道中由縁俳

中島生々庵

プロローグ

大学を出てから三十八年になる。他のクラスから見ると一寸異常と思われる程、仲のよいクラスである。毎年クラスの総会を十一月二十三日と定めて開くのであるが、九州地区ではまだ一度も催したことがないで、昨年の総会で、三十七年度は九州別府と決定、地元の人達が世話役になって準備にかかったのである。卒業してから三十八年ともなれば会員が年々欠けてゆく。その寂しさを補う意味で三年前から夫妻同伴出席を原則とすることになった。

さてこれは私事で恐れ入るが、生々庵30才小石21才にて結婚、爾来三十五年になるが、毎年毎年9月23日と定めて開くのである。これからは先もそうである。何も不思議なことではないではないかとお叱りは当然ながら、この9月23日という事実一寸頭を回転させてみると面白いことを発見する。それは11年目毎に二人の歳の数字が逆になることである。生々庵43の時、小石34、54の時45というわけである。こうしたことが40代から90代までに6回ある。本年は生々庵65、小石56。残ると

ころ三回、98と89まで生きるとすると丁度今年が中央である。結婚以来の家庭暦を調べて見ると、逆の数字になった年の前年とその年と次の年の何れかに何事かの朗報が出て来る。昨年ヨーロッパ旅行から帰って来て、今年は残って居た末の三男が大学に入つたし、孫は男一人女一人と先ずは芽出度い裡に本来度が終ろうとする。その折柄十一月二十三日別府でクラス総会というので、九州地方に余り知識のない小石を案内する。生々庵にしてみれば九州各地に20年振り、30年振り、40年振り、50年振りという思い出の地や、ゆかりの人々を訪ねて見たい念願。茲に「二人道中由縁俳」と相成った次第である。

伊丹空港

十一月二十三日正午別府到着は動きのたれぬ予定であるから、旅行社にたのんでスケジュールを逆に組ましてみた。それによると

十一月十六日朝九時、伊丹発の飛行機で宮崎に飛ぶのである。ところが二日前から台風28号が、怪しげなコースで北々東に進んできた。どうせ生々庵の雨男、雨具の用意位にぬかりはないのだが、愈々十六日の朝である。七時前起床してみると底気味悪い気象ニュースである。風を混じえた雨が降っている。伊丹まで見送る三男がからかい半分に、両親が一度に墜落死すれば、遺産は兄弟で三等飛行機は一度ですむわけだ等と飛行機の難行を大袈裟におどしにかかる。その手には乗らじ、自若として、伊丹空港に着いたのが、八時半である。何となくざわめいているのは着発ともに大分ダイヤが狂っているらしい。私達の宮崎ゆきも、定刻九時近くになっても出発のアナウンスなし。係員に交渉してみても、南九州の気象状態が極めて悪く、只今パイロットをまじえて会社の首脳部が現地と協議中である。最悪の場合取り止めにな

るかも知れぬという。前途に十日間こまかいスケジュールで旅に出る身にしてみれば取り止めにでもなったら大変である。さりとてこんな時に慌てるのが最大の愚である。必らず道はひらけてくるよと、我れと我が身に言いかけつつ、時間を待つ。ちらちらと不安が襲うてきている中に愈々出発のアナウンス、篠つく雨の中を乗り込みである。

飛行機

丁度一時間遅れて離陸。全日空御自慢のフレンドシップ号ジェット機である。翼が機体の上部についていて、窓からの眺望が自由なのが自慢の一つである。乗り込んでやれやれ座席についてベルトをしめる。ホステスがきれいな声で型の如くいろいろ注意を与えるのであるが、気のせいかなその声が上がっている。「三百キロ南方に台風28号が東へ進んでおります。定規のコースを変更致しまして、岩国、大分を経て宮崎と参ります。途中多少動揺する箇所もあると思っておりますが、御気分の悪くなられた方はお早い目にお知らせ下さい」受け取り方によっては「このような悪天候によりもって乗ったお前等は余程目頃の精進よろしきを得ないからだ。覚悟はよいか」とも聞える。而もどうやらホステス自身いささか参っているように見えるので乗客の不安は一層敏感となってくる。「只今岩国から大分にかかりました」の辺は、少なくとも三百米位の上下を、つきつきされ、はね上がり。約三十分間位続

川が暖かい雨に

きく大淀
や、音に
でいるの
れて並ん
クスがゆ
フェニッ
国特有の
心は、南
宮崎の都
ら眺める
って室か
稍々あ
きた。し
き散だ。

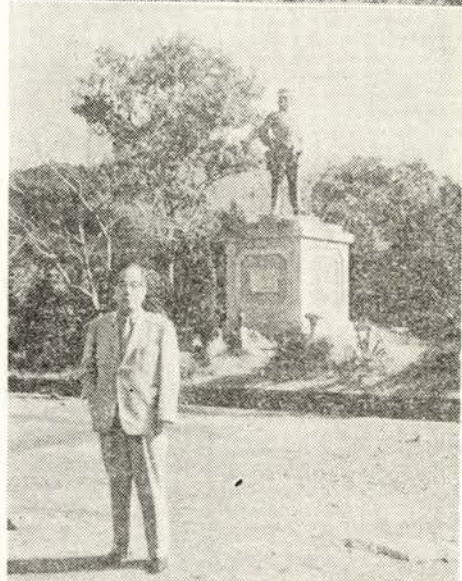
いた。ありていに申して生きたこ
こちもなかりけりである。十一時
五十分宮崎空港に着陸した時のや
れやれは、如何に私の達筆麗辭を
もってしても表現は出来ない。ホ
テルからの迎えの自動車にゆられ
て玄関に降り立った頃は現金なも
ので凱旋將軍のように落ちついて
いた。
ベルトを固く 固く ホステス
声けわし
お自慢のゼット機窓は雲ばかり
血の気のない顔が煙草ばかり吸
い
エヤボケット泰然と妻への見栄
があり

宮崎↓霧島高原

るのも旅情第一歩の日にそぐわし
る。
雨にぬれフェニックスゆれて神
話めき
翌朝六時、目が覚めると雀はチ
ュンチュン窓のまともに陽があか
い。早速車を仕立てて貰って市内
見物である。
ヒスに似て今朝はけろりと晴れ
わたり
日本建国のブレイリウドを奏で
ながら天孫降臨しました高千穂
の霊峰を朝夕仰ぐ宮崎の街にもバ
チンコの看板がけばけしい。
宮崎神宮に着く。伊勢大神宮を
模したといわれるだけあって莊重
の気溢れているが規模は比較にな
らぬ。神武天皇が祭神であるが、
霧原神宮との関係は委しく知らな
い。宮崎市民としては言い分もあ
ろう。



えびの高原・小石夫人



橘神社前―中佐銅像前にて、生々庵医博



鹿兒島市―城山にて、生々庵医博

こちらが本家と神武さま祭られ
る
街を離れて南へ、こどもの国遊
園地と、青島。子供の国というよ
りも熱帯樹公園と呼んだ方が適当
だと思ふ。バナナの林。サボテン
群、見上げるフェニックス、幽遠
極まりない芭蕉谷。展望台に登れば
昨日の名残りとも黒潮の波頭が荒い
遠望。古事記に出てくる海の幸、
山の幸の神話は青島が中心とい
う、その青島が指呼の間にあ
る。
古事記の神話秘めてピロ―樹茂
る島
黒潮に洗われ海の幸山の幸
芭蕉谷清流に影動かない
宮崎の街に別れて車は一路霧島
に向う。有料道路といっても舗装

なしの凸凹道。標高五百七十米の
ところにゲイトがある。四百五十
円とは高い料金。
三時半えびの高原ホテルに入
る。外観はコテイジ風だが内容は
豪華で皇太子さまも美智子妃と御
投宿なされた由。あたり一面の薄
の穂が晩秋美しい朱色に染まると
ころから、この一帯を海老に似た
えびのと呼びならわされたそう
だ。あちこちの岩陰から蒙々と上
がる白煙、つつじの紅葉がそれに
混って錦に光る。温泉にひたりな
がら窓ガラス越しに眺めるこうし
た風景は如何にも雄壮で何ともい
えぬ高原気分である。
高原キリシマここにきわまる雄
大さ
湯けむりがみぞれになって頬を
打ち

山一はい綿帽子に見ゆ薄の穂
霧島↓鹿兒島
↓指宿
翌朝ホテル出発鹿兒島へ。ホテ
ルを出て間もなく林田温泉街を通
る。今から五十年前、鹿兒島市内
に病院を持った伯父に案内され
馬車で通ったところだが、勿論私
の記憶にある家並みなどは全く見
当らず、ただ心の底から愛して呉
れていた母の長兄である伯父の面
影がくっきり浮び上がって、別荘
に着いてから温泉の流れでゆてた
卵を二つ三つ食べさせて呉れたこ
とやら土産ものを買って貰ったこ
とやら、車を停めて感慨にふけっ
た。この旅で謂う「由縁佛」第一
号である。
九十九折の有料道路を走る程に
高千穂の三角峰は遠く離れてゆ



句 評

リレー

八尾市 西尾 榮
岡山県 田垣 方大
朱子市 小西 雄々
石川縣 関戸 宗太郎

今日も暮れる金の包みも拾わずに 望峰

栗一作意のある句だね、まともに解釈すれば毎日金の包みを拾いに出ていこうで、今日もその目的を果さず暮れてしまったという解釈になる。川柳的にいってそうでないことはよくわかっていて、が、余りにも古川柳に近代的な味付したように思うが如何。

方大「金の包みを拾わずに」は「幸運にもぶつからずに」と解釈出来るが、これは人間の弱さを表示しているといえる。我々庶民はふとそんなことを思うこともある。このような句の人は金を拾っても猫ババ出来ない人である。真面目に働き一日中かけ廻っても「わが暮らし楽にならざり」の方である。庶民の生活心理をちよっぴり描写している。栗さんは、齒に衣を着せず、ずばりと言っている。御批評の通りであるが、私は少しやわらかく評してみました。雄々「散歩していると、何かにつまずいたので、よく見た

ら札束にけつまずいていた」と、いうようなことが、一度位あってもいいなァーと、友人と冗談を言っていたことがあるが、そういう所謂「棚からぼたもち」式の考えを、まとめたところは面白いと思う。また方大氏が言われたように「幸運」に恵まれず、今日も一日暮れてしまったと解釈しても、句のねらいは成功している。生活に追われていると、こういう心理もうなずけるが、リズムがもう少しほしいですね。宗太郎「新聞紙に包んだ大金を拾う。ラッシュの街に一万円札乱舞。こんな三面記事を読んだことがある。金欠病におかされると「金の包みでも落ちとらんかいな」と思うのは大判小判の昔から変らなない偽らざる人間の心境であらう。当を得た栗さんのご批評に言葉を添えれば川柳的に解して一応水準に達した句だと思う。栗「今日も暮れるか」とかの一字を入れてみてはどうだろう。又、金運のない我なりき今日も暮

れと逆にしては如何だろう。とまれこれ小判たった一晚いてくれろから、金に縁のない川柳が余りにも余りにも多すぎる。方大「栗さんのお言葉は「川柳は大衆のものである」証左に仲ならない。金も拾わずに暮れたから明日へのファイトが湧くのであつて、この句は読み流すと置き忘れそうな句であるが、よく噛みしめると麦飯の味がする。雄々「とにかく人間の物欲を端的に表現したところに、この句のよさがあるのではないですか。古川柳以来、金に縁のない句が多いのは事実ですが」。案外こういう考えの人は多いと思います。

味のこー

モダン 川柳

心齊橋大丸北の辻東へ

御門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい



宗太郎「汚職。脱税。詐欺。いかなる場合でも金が付きまとうている。ぼろい話なら少々あぶない橋も渡って見たくなるだろう。

く。そこへボツカリ桜島の噴煙が見え始める。鹿児島市内から見るとこの高原から遠く眺める桜島が好きである。銀色の薄の穂に包まれて有料道路は漸次降り坂である。左右は殆んど芋畑、今や芋の穫り入れのまっさなかであらう。トラクも牛車も芋、芋、芋である。

やがて鹿児島市に入る。高層建築がたまた並び、パチンコが繁昌し、マンボ姿が腕を組んで歩いている。中学時代に見た眼には全くの驚きである。日曜日だったせいもあってか、メインストリートもさることながら、島津久光の磯邸、明主斎彬の照国神社、鶴丸城址、岩崎谷、城山等大変な人出である。今更西郷さんの時代でもなかろうが、薩南健児の健在を心の隅に折りながら城山を下った。動中静あり桜島の煙淡し

鹿児島は頑固でこわすも過去ののこと

西郷さんも見馴れたマンボ赤い爪

鹿児島で明治生れがまだ通じ桜島は遙拝ということにして、指宿まで二時間半走る。宮崎のホテルから延々指宿まで二日間巨り親切に安全に運んで呉れた運転手君にここでお別れをする。

指宿までのドライブウエイは鹿児島湾の波打際、桜島が後から見えかくれつつくる。九州最南端にあるこの温泉郷は附近に薩摩富士と呼ばれる開聞岳、浦島太郎の童童神社と見物するところも多いらしいが旅先きは長い。ホテルで静養ときめ込む。

隻手の句 まだ詠みきれず 不具四年

高須啞三味

東京都港区芝南佐久間町一ノ五二

大坂形水

大阪市東区茶屋町一ノ二

指宿↓熊本

翌朝指宿を立つて西鹿児島から特急「はやぶさ」に乗り込み十五時には熊本に着いた。昨日まで飛行機とハイヤーの連続から久々にゆつたり東京行の特急は乗り心地満点。それにしても座席の右も左も前も後も新婚さんらしい連中はかり。絶え間ない話声で句も作れない。

熊本駅に着いたらすぐタクシーを拾って、ホテルは後まわしの市内見物とする。このタクシー運転手君が昨日までの宮崎のに劣らぬ感じのいい男。要領よく水前寺、熊本城、本妙寺、加藤神社、はては吉田司家の門前まで案内して呉れる。熊本とのゆかりは陸軍幼年学校を志望中眼の外傷で断念したことから初まり、中学卒業後高等学校の工科に受験に出て失敗し、三日程滞在した思い出がある。あれから五十年だ、もし幼年学校に入っていたら、もし工科に入学出来ていたら。人の運命というものの

ただし限られた階級だけにあたえられたチャンス？であり善良な庶民にはかわりのないことである。期待した所得倍増論が物価にだけ当てはまりすぎて金の包みでも落ちておらぬかと思う心境はあえて作者一人だけのものではなからう。

ペンキ屋が一番大衆向に描き

遠二
梁ーペンキ屋がピカソ、マチスに描いたのでは広告の使命を果すことが出来ない。誰にも解るように描いてこそ広告の価値があるのだが最近余りオノドックスな絵や字を描いたのでは見る方にアツビルすることが出来ないのだ、この頃では新聞の広告の写真など横向きを逆さに撮して如何にして大衆の目を奪うかと苦心している。ともあれ我々が見逃す事態を旨くとらえている老巧な句だね。

方大ー少々刺戟では感じなくなっている現代人には、これでもかこれでもかと変ったことをやらなければ、効果がなくなってきた。然しあまり奇抜なことをやると逆作用を起し、平凡ではあるがまとなものの方がうけるという現象を起す場合もある。この句はそういう処まで描写してて実にうまい。

雄々ー最近ペンキ屋の技術も進歩して、街を歩いていても感心する広告を見かけるが、そこをたくみにキャッチした、いい句だと思えます。

宗太郎ーペンキ屋とは板塀や建築物を塗りつぶす塗装職人を用

い、看板、広告、を描く職を看板屋とすれば大衆向に描き当を得ていない。僕のセンスからすれば、「看板屋一番大衆向に描き」となります。何か片意地のようには思いますが、野大工と建具屋ぐらいの違いがあるのではないですか。

梁ーペンキ屋と看板屋をこっち

やにしていたことを宗太郎さんに指摘されて、読みなおした。だが一番大衆向に描きの一番というのは何と比較して一番だろうか？、看板屋は持前の腕でゴジックにでも、花文字にでも描くがペンキ屋の描く文字はただきまつた即ち駅名に書いてあるような大衆の誰もが読める字ということになるのではないか、但し描きという字は、えがきの意なれば矢張り書

車
福壽司

心 斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番

き若くはかきではないだろうか。方大ーペンキ屋だから面白いのであって、芸術家をもって任じている看板屋であつたら何の変哲もない句である。有名な画家も志を得ない苦斗時代は看板屋の下絵を描いていたというようなことを聞

く。宗太郎さんと看板屋の定義について議論するつもりはないが、この句は「ペンキ屋」として世相をのぞかせているところをとりた

川柳雑誌社鳥取支部

鳥取川柳会
同

い。

雄々ー私が勤めている国鉄、後藤工場では塗工職場があつて、その中には宗太郎氏のご説のように、ただ塗りつぶす塗装作業と、看板や文字を書く二つのグループがあるが、前者をペンキ屋、後者を看板屋と区別せず、どちらも通称ペンキ屋と呼んでいる。この句もそこまで考える必要はなく、ペンキ屋が一般大衆に、一番アビールするように書いてあるわい……と、現代の一端をとらえているところを、いただいた。

宗太郎ーペンキ屋の定義に始終してしまい我ながらまずい理屈をこねてしまったと思います。描きに少しこたわり過ぎたようだが短詩型の川柳ではわずかな一字たりともおろそかにはなりません。一字の解釈の誤りで佳句が一変して駄句になってしまうことがある。誤解を招くような漢字はかな文字にしたらいかがでしょうか。

(担当・真鍋一颯)

の不思議さ。小石にとっては普通の都市見学と変らなく特別の感慨もなさそうな顔である。泰勝寺の境内は現在市立天然公園となっているが、細川歴代の墓碑、ガラシヤ夫人も並んでいる。少し奥深い庭続きに宮本武蔵の墓が半ば朽ち苦むしになっているのも寂しい気持ちだった。

五十三次水前寺の池逆さ富士
宮本武蔵ここに眠るが森深し
熊本ー島原

翌朝ホテルを出る頃から雨だ。ようこそ昨日の間に見物をすましたものだ。昨日のタクシーを予約していたので三角まで一時間余り、三角から島原ゆきの鳴瀬丸に乗り込む頃は雨足しげく一本の傘でやつと二人が運ばれる仕末。而も大阪を出る前からいろいろと描いてきた亡き父の佛は船室の小さい窓にかすむ天草の島々と共に、險の裏をあつくしながら眺めてる外はなかった。

一足先きに任地島原に赴いた父を追うて、郷里佐賀から母に抱かれ、この天草の海を渡ったのは六十年前のこと。勿論思い出すすがとてもないが、成人後母に当時のことを聞かされたり、船の汽笛に両耳を指で押えたりした記憶らしいものが残っているにすぎない。

それから二年の後、父は若い人世を閉じたのであるが、爾来父懐しさの思いが妙にこの島原につながってくるのである。一度中学四年の時この地を通って雲仙に登った以外、たえて訪ずる機会もなかった。それがこの旅「ゆかりのお

もかげ」が小石を連れて運んで呉れた。

雨でよかった。桟橋でぬれた島原の雨。私はタクシーを呼ぶのも忘れてたはずんだ。実際とは違っているかも知れないが、私は私なりに險に描いている父の佛を雨雲の中に浮ばせながら、一点の雲もない秋空よりも、あたり静かなこの雨でよかった。三十を出たばかりの若い父の面ざしに、七十九まで生きていると呉れた母の佛が寄りそうているではないか。雨でよかった。雨でよかった。さめざめと私はそう思うてたはずんだのである。

母に抱かれこの海六十年の過去島原の雨我れ三才の目が恋し島原の雨險に父母よりそうて島原の雨汽笛がむせび泣きに似る

さらば島原險の父よ雨かすむ
(つづく)

謹 賀 新 春

中 島 生々庵

中 島 小 石

大阪市南区巖谷仲之町二〇番地



入門講座

研究題「自信」

清水 白柳

自信過剰未だに不惑平社員 S
自信過剰未だにとれぬ免許証 繁太郎

前の句は「未だに不惑」というのは変に感じられる。これは「不惑」はまだ平社員とするのが本当ではないかと思った。次の免許証の句はユーモアもあり佳い着想で面白い句に仕上がっていると思ふ。

やりくりは自信があつて長湯する ゆっくり落ちついて湯にひたつていられる程の自信は羨ましい限りである。今回の集句の中では白眉の句である。

自信あるらしく幹事が追加する 保夫

追加したのは酒かビールだろう。こうした情景はだれしもが経験することだが、なかなか句にまとめられないものだ、よく詠まれているのしい句である。

駅前に住んで次発も乗り遅れ 隆史
鋭い風刺を持った句でユーモアたっぷり詠まれていて好感の持

てる句である。句意はいうまでもなく、自信という文字を使つてないのもおもしろいと思つた。

親方の眼に自信作氣に入らず ひ呂し

親方というのが少し気になるがこれでもよいだろう。親方氣質とでもいうのか封建的なにおいがしてその自信作が前衛的なものであるらしいところまで想像させられていい句になっていると思ふ。

五十年放なす氣もない聴診器 静観堂

作者の実感がにじみ出ているので共感を持つてゐる句である。自信満々といたつた処がうかがえてたのしい。

自信に満ちたメスへ全てをおまかせし 一鶴

この句は患者としての実感であろう。すべてをおまかせした心の安らぎを感じさせられて真実味にあふれた句といえるであらう。

毛筆に自信失をまだ持つて 宗義
矢立とは古風なものを句にした

ものである。然し毛筆に自信があるとは面白い着想であつてそのために矢立が生きてきたのである。まだまだ持つてゐる作者が客観的に表現したのも成功した原因であると思ふ。

家康の例を自信に辛抱す 周甫

山岡莊八著徳川家康がベストセラーになっているが、その家康の言行を自信を持つて実行しようとする意志の強さを句にしたのだと思ふが少しものたりない感じがして残念である。

あゝ頃はあの頃はと自信消えかか 真奇

生活が豊かであつたあの頃のことばかりを言い暮すようになったのは、人生をようやく盛りをすぎたからだろうか、そうなるのと何事にも自信が持てなくなるのである。うがちの味を持つた句である。

政権の自信は辞めるとは言わす 秋月

数学の自信首相は術に使い 隆義

算術に自信ないのが儲けと 八郎

最初の句はあまり佳い句とはいえないが、まあまあというところであろう。次の句の上五の数字は数字の間違ひでないかと思ふ。

首相に数学の自信などといったら 八郎

叱られるだろう。これは数字の間違ひとして頂くことにする。最後の句の算術は明治時代に生れた者だけが使う言葉になつてゐるよう

に思ふのでこれは数学にした方がよいと思ふ。

隠し芸指名符つてました自信 Y

ついて来る自信は妓へふりむかず 宗義

梯子酒の句は梯子酒に自信があつて廻礼にも困らないというのだからこつとした着想は古句にも多くあるので避けるようにしてはいいと思ふ。

肝臓に自信とはほほえましい 八九寸

詠み方でうれしかった。隠し芸の句はよくある事柄だけに別の観点から句にするか、表現をよほど変えないといけないと思ふ。ついでくる「の」の句は佳句であるが自信は省いた方が句がすっきりすると思ふ。

ハナドルに自信妻子を乗せている ひ呂し

酔うている自信敬遠タクシーにす 八九寸

オープンカーに乘れる自信を持つ 美貌

ハナドルの自信おだてる 秋月

妻子を乗せているの句にはユーモアがあつて面白い。お父さんの自動車だと危いと言われていたのだから自信が出来たのでドライブにでも出かけるのだらうと考えると面白い句である。酔うてゐるの句は運転してくれる友人か何かが大した酔いでもないのだが、これれ位飲んでも大丈夫だよと自信たっぷりですすめてくれるのを敬遠してタクシーを拾つたという句意である。表現に少し無理な点があるように感じたがどうだろうか。オープンカーの句は、ミス何々に選ばれる自信を持つてゐる女性ということだけの句にな

南区医師会文化部

杏林川柳会

岩崎一伸

海野五十六

河村瑞川

中島生々庵

中島小石

平尾太希志

福井野迷路

牟田一哲

安岡瑠枝郎

山川阿茶

・謹賀新年・

川雑婦人友の会新春句会
日時 1月20日(日)午後一時

会場 中島小児科診療院楼上
大阪市南区三休橋南詰
西電話四三九八四(一)

柳話「個性を生かせ」
麻生霞乃先生

兼題各三句
「あこがれ」
「返り咲き」
「春」
「偶」
「素」
「席」
「会費」
「当日発表(二題)」
「三百円(食費共)」

授句先 大阪市南区二ツ井戸
町二三 山川阿茶

授句先 大阪市南区二ツ井戸
町二三 山川阿茶

授句先 大阪市南区二ツ井戸
町二三 山川阿茶

授句先 大阪市南区二ツ井戸
町二三 山川阿茶

金泥集

選乃葭生麻

一帳羅恵方詣の雨にぬれ	阿茶	この神の運よく恵方におわし	一栄	恵方より来た嫁にしたのもしく	寿美司
方角が少々ちごても恵方にし	同	恵方の神主皮算用に忙しく	同	矢をもってゆれる電車にぬむうけ	同
交通禍恵方詣のその帰り	同	恵方とやら二十代にはピンと来ず	同	人間の欲恵方の神が恐れ入り	周甫
スキーにも恵方へゆけと母さかす	同	商賈の東西南北みな恵方	きさ子	恵方など気にもかけない気の若さ	あいき
コマーシャルどこもかしこも恵方	清子	いい婿がいま恵方の卦を信じ	同	うちからはいっこ恵方でない恵方	葭乃
恵方詣り古さを笑う娘も交り	同	タミナルどこがほんまの恵方やら	小石	恵方詣りも代参させる忙しき	同
恵方詣りしたのにええことなしに過ぎ	同	人間の弱さ恵方にも詣り	同		
恵方詣り引いたみくじが凶と出た	同	恵方でないけど好き好き好き	美喜		
		恵方だというに縁談こわれかけ	同		

次回題「裏はなし」切一月末日

年賀の品ときめなくてもよかったと思つたのだが、季節をはすねると来年の暮まで積んでおかねばならない正月用品を着想したのはやはり成功しようである。

「恵方」
専翁

折角教えてやつたのに、そんなことなら知つていたとか何とか大きな口をきいたという句意をすうた。詠んでいて難がないと思つた。売り盡す自信はすれた年賀品

「自信なき答案提げて伏目勝ち」
1 自信なき答案提げて伏目勝ち
2 胸張って自信の程の答案紙
3 答弁の自信ゆつくり立上り
4 自信あつた英語がのどにひっかかり
5 コネのある自信試験にあせらな
6 今度こそその自信またまた落選し

み

んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス

積水化学
本社 大阪市北区宗是町1

照見
真奇
福郎

「自信なき答案提げて伏目勝ち」
1 自信なき答案提げて伏目勝ち
2 胸張って自信の程の答案紙
3 答弁の自信ゆつくり立上り
4 自信あつた英語がのどにひっかかり
5 コネのある自信試験にあせらな
6 今度こそその自信またまた落選し

次回研究題「古」
切一月二十日
発表三月号の予定
宛先 大阪府南河内郡美原町丹
上四〇四 清水白柳宛

川維婦人友の会

明けましておめでとうございます

山 川 阿 茶
岩 田 美 代
宮 尾 あ い き
酒 田 章 子
西 村 梨 里
林 村 春 栄
中 村 晴 子
西 川 み ち 子
西 出 由 美 子
内 藤 白 花 子
藤 岡 花 子
置 田 奈 子
久 米 奈 子
沢 田 美 喜 子
吉 川 悦 子
市 場 カ 子
八 木 徳 子
小 西 富 子
内 藤 き 子
藤 村 陽 子
光 好 陽 子
酒 田 清 子
西 出 操 子
高 橋 良 子
太 田 小 子
中 島 阿 茶 子
山 川 乃 子
麻 生 乃 子



一路集

主役

丸尾潮花選

芸能一家主役をこなす子に育ち
念にねん入れて主役の厚化粧
仲人が主役新婚送り出し
横車おして主役を買って出る
空白の主役へレッスン熱が入り
8ミリの主役よりよ歩かされ
大見得を切った主役の見世場なり
ぱっとせぬ主役金蔓つかんで居
成り切った役主役も泣ける
会場を掃除している主役なり
世話焼いている中に主役になつて
新スター主役の事故で掘り出され
主役の子風邪で学芸会あわて
あんな子が主役大人をひき廻し
出来もせぬ癖に主役になりたがり
大掃除妻三軍を指揮主役
貫うたが主役仲間こなされず
新人の主役へあらぬ噂立ち

主役より切られる方で気が疲れ
前売りをすっかり売った主役の名
土壇場まで妓主役を手こずらせ
その色気主役の齢を忘れさせ
主役という条件も義理へ断ち
一二主役を撮ってスリット消え
タイトルに一人主役の名が目立ち
ひがみなど見せぬ不具の子主役にし
純情なヒロイン煙草も酒も好き
たくまざる子役主役をしのいでる
老優の名技揺がず主役の座
抜擢をされ大部屋に気をつかい
主役が一人重たい汗をかき衣裳
脇役がよすぎて主役小そう見え
美事なる主役米寿の大胡座
学芸会主役の衣裳に母が涙り
初舞台何れ主役で踏むつもり
頼りない主役に端役まで難儀
内の子が主役家計をいうとれず
主役だけ脇の良さをば知っており
責任をとると主役の頼母しさ

雄々 隆文 生一 孝正 晃男 光郎 秋月 与太郎 八九寸 東雲楼 凉人 孝風 庸佑 惠二朗 灯竿 素身郎 静水 圭水 皇太子 花乃子 秀夫 圭井堂 宗太郎 旭峯 蛙水 卯之助

コンピにはぶたれてばかりいる主役
やりくりの主役は妻に演じさせ
演技派の主役で意見食い違い
ほんほんの主役キップが束束くる
交渉の主役の肩が落ちかから

主役の馬鹿が舞台一ぱい笑わせる
脇役に叱られそうなの主役

台本へ主役としての眼をつむり

ベレー帽

河村日満選

大股に歩きたくなるベレー帽
個展から菊見てバーベレー帽
カンパスはそれ程でもないベレー帽
パパベレー貸してデートの娘もベレー
ほんぼんで内ベレーのベレー帽
ベレー帽同士ゴルフへ誘い合い
コーヒーマラックで飲むベレー帽
愛人と三三違うベレー帽
料理屋でどうも脱いだベレー帽
そのわりにベレー見かけぬ甲子園
ベレー帽背の低さがめだつなり
若こう見えまっしやうとベレー帽
画架提げて日曜画家というベレー
十年も若く見させたベレー帽
独身という気楽さのベレー帽
追放に拗ねて以来のベレー帽
ベレー帽かぶって夢を追いつつ
焼香の列に不向きなベレー帽
葱下げて露路へ曲ったベレー帽

千翁 石峰 秋月 勝子 花乃子 代仕男 素身郎 生薑 静波 淀月 圭水 どんたく 圭井堂 秀夫 藤波 同 与太郎 たけお 和三郎 祥月

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

タチカワビン
タチカワゼム
タチカワ面紙

大坂市東区豊町二丁目十一番地
立川ペン先株式会社

・ 謹 賀 新 春 ・

三 条 東 洋 樹 神戸市兵庫区神田町 四〇番地		橘 高 薫 風 子 大坂市北区堂島上二ノ五二 電話(341) 四六一三番		唐 崎 専 翁 大坂市住吉区帝塚山東二丁目 電話(六七) 〇四二一番 (七七) 八四六三番		西 い わ を 南河内郡美陵町野中 一六七		謹 賀 新 年 山 田 季 賛 山 田 ス ミ 子		富 柳 会 高 橋 尚 史 富 柳 会		浅 川 八 郎 忌中につき欠礼 山内 房 子	
--------------------------------	--	--	--	--	--	-----------------------------	--	---------------------------------	--	---------------------------	--	------------------------------	--

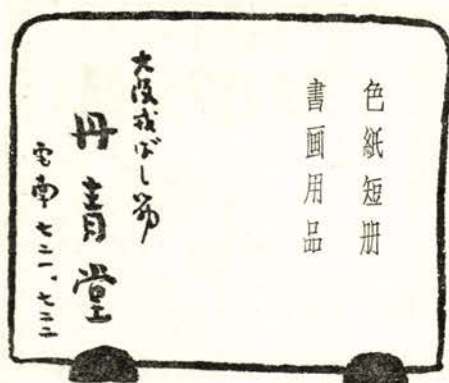
丸木橋もまだあるだらう 里心 秋月
出戻りのやつと落ちつく 里心 石峰
里心旅でわが家のよさをほめ 秀峰
里心チョッピリ出した運のつき 静水
里心さそう店屋の茄子の色 隆文
里心ふと父さんの夢を見る 雪美
里心つくの母が甘えさせ 明朗
ばあちまのお菓子も効かぬ里心 どんたく
全快も近く上戸の里心 涼人
ホームシックな夜を涙する里心 祥月
和洋食父母にあまえた里帰り 隆史
集団就職一人になって里心 宗太郎

小西雄々選

里心

ベレー帽がぶれば画家の型になり 庸佑
ベレー帽車中の視線の的となり 寿美司
ベレー帽かわゆく揃う鼓笛隊 恵二朗
おかしくはないかと父のベレー帽 静水
ベレー帽三味も小唄もきかせず 旋鳳
インタビューまで 如才のないベレー 卯之助
パーカーを三本胸にベレー帽 十九平
佳
ベレー帽停年過ぎて若返り 恵二朗
鴨猟の日の天皇のベレー帽 旭峯
町はずれからかき出すベレー帽 むじな
金策に出掛けるときもベレー帽 雄々
ベレー帽へ女将色紙を持つてくる 宗太郎
人
人間が出来てベレーもよく似合い 紀太呂
地
時の人をみんな呼びつけベレー帽 八九寸
天
ベレー帽祝辞の中へ詩を混え 十九平

里心くねった路がなつかしい 淀月
病窓へ落葉ひらひら 里心 一鶴
里心おこし列車が通り過ぎ 大八洲
さとされて家出娘に里心 与太郎
松茸を買えぬ市場の里心 紀太呂
里心押さえて機械嫌なめなり 保夫
里心回り道して赤電話 東雲楼
里心ついて故郷で逮捕され たもつ
里心一途に募る不甲斐なさ 繁太郎
長旅行郷土の記事を懐かしみ ろ亭
里心ほのかに起こす国訛 野迷路
姑とささいなことで里心 蛙水
里心父の怒りも懐かしく 雄声
里心断って苦節の錦着る 旋鳳
時効まで出さぬ気だった里心 桂仙
汽車賃がないからつる里心 光一
どん底の夢は故郷にいた昔 光郎
里心ついて祖父母をてこずらせ 庸佑
里心もう反抗はせぬと決め 千翁
春秋の花に紅葉に里恋し 藤波
家出したその日の宵に里心 ひ呂し
里心お茶やお菓子でまかせられ 隆子
土曜日の夜行で着いた里心 愛鳩
里心さそうトタンに降る霰 むじな
古里は湖底にあるに里心 素身郎
里心ただなんとなき筆をとり 宗義
同様の主張に負けて里心 代仕男
里心羽があつたらなと思ひ 旭峯
里心駅の汽笛が風に乗り 卯之助
ホルモンの匂いに浮かぶ里心 弘朗
里心秋の味覚を恋しがり 古心
里心浅草の灯にまだ未練 孝風
里心ふるさとこよなく美しい 十九平
里心高価な葎を買って食べ 花乃子
里心故郷が写っているテレビ 圭井堂
現実の冷めたさにふと里心 圭井堂
里心母の手紙を三度読み 和三郎



鍋雲あすは故郷の秋祭り 和三郎
里心独身寮は寝しずまり 恵二朗
家出するのではなかった里心 恵二朗
佳
里心四十になって笑われる 可住
里心住込み部屋の夜が更け 静波
仲麻呂のように月見る里心 灯竿
児を見せに衣裳見せにと里心 専翁
芋粥の湯気眼にうつる里心 生薑
里心手頃な嘘を考える 孝正
東京見物に疲れた母の里心 晃男
一人産むたびに遠のく里心 千翁
夫には不足はないが里心 代仕男
里心遠く電車の軋む音 卯之助
人
里心不吉な夢がつづくなり 清人
地
行きだけの費用を持って里心 圭水
天
里恋し霜焼の掌のかゆい夜 光道
軸
お土産のいる里心に気がふさぎ

・ 謹 賀 新 春 ・

年も新らた

ベスト10へ

ファイトも新らた

麻生路郎先生選

大 万 川 柳 会

投句ご希望の方は

大阪市阿倍野区松崎町3の10 松江梅里方へ

柳界展望

句会
▼本社新春句会は七日(月)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。新年の初顔合わせであるから、柳友多数お誘いの上御出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林忘年川柳句会(大阪市)は十二月十七日(月)午後七時から島の内の料亭蝶六で開催。▼大阪通信病院忘年句会は十日(月)午後五時から堂々芝罘光殿で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は十二月十三日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コトヨ川柳句会(大阪市)は十二月二十一日(金)午後六時から黒田園光堂で開催。以上路郎主幹出席。▼川維備前支部句会(岡山県)は十一月二

十四日横山一声居で開催。▼島根県下川維支部主催の清風社竣工記念句会は十一月二十五日湯田温泉国民宿舎清風荘で開催。湯砥町明、尼緑之助、岡崎祥月、藤井明朗氏ら出席晩秋の一日を楽しまれた。▼川維篠山支部忘年句会(兵庫県)は十二月九日(日)午後一時半から多紀町福住遠山可住居で開催。▼明和川柳研究会(西宮市)甲南川柳教室(神戸市)共催の合同忘年句会は、十六日(日)午前九時から北摂へバス吟行、能勢妙見沿線の汐の湯温泉でぼたん鍋を囲む会を開催。▼故浜夢助翁句碑建立除幕式は十二月九日(日)午後二時から仙台南市西公園で開催。句碑には「雪国にうまれ無くに馴らされる」の句が刻まれてあるが除幕式では路郎主幹の祝吟「沈黙は金なり石となつて立ち」が朗読された。▼川維岡山支部は十二月八日久米雄居で例会開催。▼名古屋



青森県の川柳の基礎を築かれた故小林不浪人句碑「あきらめて歩けば月も歩き出し」「動中に静を求めて煙草の輪」の除幕式が十一月十一日黒石市中野神社境内で挙行された。

屋市西区民川柳大会は十二月二日西区役所講堂で開催、市長代理、区長も出席盛大であった。▼宮城野社(仙台市)新春川柳大会は昭和三十八年一月十三日(日)午前十時から外記丁通り北二番丁角建設業会館で開催。▼さっぽろ創立五周年記念北海道川柳大会は昭和三十八年一月二十七日(日)正午から札幌市六条西三國鉄クラブで開催。▼オホーツク新春川柳大会は昭和三十八年一月二十日(日)北見市北見会館で開催。兼題は親類・台所・陳・裏通り・養子・黙認、投句料百円、一月十日迄に北見市南仲町七八北見川柳社宛。▼大山竹二追悼句会は十二月九日



八代文化祭で柳詠をさるる「川柳研究」(熊本県)の田中辰二氏(十一月八日)

(日)正午から神戸市の海洋会館で開催。▼第十六回美術作新年川柳大会は昭和三十八年一月二日午前十時から津山市山下津山商工会議所で開催。▼第十三回東都川柳大会は昭和三十八年一月十五日正午から東京都渋谷区書館で開催。▼広島川柳会第十三回新年交歓三十六回川柳大会は昭和三十八年一月六日(日)午前十時から広島市平和公園内平和記念館二階で開催。詳細は広島市吉島本町合同宿舎RG十一号樋口悠洞氏へ。

消息

▼中島生々庵・小石夫妻(大阪市)は十一月十六日朝、空路宮崎へ、二十五日海路で天保山棧橋へ帰着するまでの十日間を、青島・霧島・指宿・雲仙・長崎・佐賀・別府などの観光デラックス旅行を楽しみました。諫早では川岡雲眼子氏宅で歓談、郷里佐賀では墓参をされた。▼橋本緑雨氏(大阪市)は十一月二十三日バスツアーで宮島参拝、秋芳洞、秋芳台を見学、湯田温泉で一泊、錦帯橋、広島平和公園へと廻り二十四日帰阪された。▼戸倉普天氏(兵庫県)は近來幸いに元氣なので、暇があれば裏山へ入り薪柴を刈り、栗林に肥料を施したり、落葉を掃いて屋敷廻りの掃除をしたりしておられる。▼川維備前支部(岡山県)では今年度の川柳まつりに七・八人出席する予定で、十円から参加貯金を始めよう。▼西尾榮氏(八尾市)経営の製菓工場約二百坪が、十二月五日午前四時出火全焼、年末年始のかき入れどきを控えて多大の損害を被られたが、直ちに再建復興に尽力していられる。▼山路閑古氏(東京都)は大磯鳴立庵

白浜温泉
万国観光旅館
やわらぎ台

やわらぎ

TEL 白浜温泉 167番

洋食・和食

やわらぎ

大阪 野田阪神駅前 電話(441)6061

洋食・和食・中華・宴会場

北極星会館

大阪 戎橋 電話(641)1275-7

洋食・和食

やわらぎ

大阪 永楽橋電停前 電話(551)7168

洋食・和食

やわらぎ

大阪 大正橋電停前 電話(551)268

洋食・和食

パンヤの食堂

大阪 野田阪神駅前 電話(441)2476

不朽洞の人々



日本楽器大阪支店の西岩雄氏

音楽の社会に生きて三十有余年、というのが僕の現在。ブームに乗ってきたのも終戦後で他人これを称して流行という。柳屋もかなり長いので、一生続けられる自信はついたが、まだまだ道遠しという外ない。精進は毎日の積重ねと念じている。旅先で知友に便りする趣味を持つ一人。

かりそめのブームに

乗ってみたい船

(いわを)

に入庵以来多忙で通していられると。▼米沢曉明氏(大洲市)は十一月十八日面河溪のスケッチを寄稿された。「紅葉よし岩よし水よし面河溪」佐野ト占氏(八代市)は奈良在任時に交際のあった香林氏夫妻の計を知り思わず涙を流された由▲又、一月二日頃に氏の郷里の播州赤穂に帰り亡父の三十三回忌を営まれる由。▼河村日満氏(鳥取市)は十一月の鳥取市議選挙戦に勝ち抜かれ、三十六位中十五位で当選、十二月十七日以降は市会議員の肩書きがついて一層忙しくなるだろうとのこと。「友多き幸しみじみと選挙戦」▼大阪芸文協会の主催で、十二月十五日午後二時から、川柳不朽洞会賛助の白川朋吉翁(大阪府なにわ賞)、関大教授の末永雅雄文学博士(大阪市民文化賞)、講談の旭堂南陵師(紫綬褒賞)の三氏のため受賞祝賀記念会があった挙行され菅橋

彦画伯が参会者を代表して祝辞を述べられた。▼川崎靈眼子氏(諫早市)は十一月二十一日朝、中島生々庵氏夫妻の米訪を受けられた。車を待たしてのあわただしさではあったが、大阪弁と長崎弁とを交えての立話。「逢えば直ぐ恩師のことが二度三度」という和やかさであったと。▼室井八九寸氏(京都市)は十一月十一日から夫人同伴で紀南へ。湯治の目的だとのこと田辺から十二月三日附寄信された。▼阿万芳徳氏(大阪市)は国鉄川柳四八号誌上で、国鉄柳界めぐり大鉄の巻を執筆。▼松江梅里氏(大阪市)は千日前の店を発展的解消し島之内へ十二月二十二日から串料理「大万」(南区豊屋町三ツ寺センター電話(211)9184)を開店された。▼野口卯之助氏(宮崎市)は胃潰瘍手術後、県病院のベッドに仰臥されたままとのこと、少しも早く快

癒されるようお祈り申し上げる。▼大西八歩氏(鳥取市)の米信によれば鳥取川維支部で十二月十六日に浜村温泉で開催、倉吉、米子方面から参加の由、なお一月には川維倉吉支部が新年句会を松崎温泉で開催するので米子、鳥取を加えて県下三都市の柳人の親睦を図るとのこと盛会を祈る。▼三条東洋樹氏(神戸市)から「お世辞でなく現在日本に出ている柳誌の中で一番良いと思います。雑誌の中の個々の句の問題でなく編集方針というか、遠大な理想を目指しての筋金通っているところに敬服しました。路郎師の遠視と不屈の精神が紙面に現われて居ります」との頼信があった。

句集・柳書

▼松江川柳いさりび合同句集第四集が昭和三十七年十一月二十五日松江市外中原町宮ノ丁松江いさりび川柳会から発行された。百十七

名の作品が一頁に二名、一名五句宛掲載されている。

甲

▼久米奈良子さん(布施市)の祖母イシノさんは十二月三日午後十一時三十分死去された。年九十三歳。▼小池しげお氏(松原市)の母堂マツエさんが十一月廿三日午後二時に永眠された。享年六十一才。謹んでお悼み申し上げます。

正誤

▼前号二十四頁上段六行目、「浮世から逃げて……」の句主名は愛媛県小林孝正に付き訂正。(薫)

不朽洞会から

★明けましてお芽出度う。一月一日午後四時から恒例により生々庵屋で路郎先生ご夫妻を迎え、生々庵理事長ご夫妻がお芽出度う会の座を持たれますので常任理事の方々は例年通りご参会を願います。本年初頭のご挨拶に併せて、本年

謹賀新春

岩崎愛二

京都府乙訓郡長岡町梅ヶ丘二丁目三十番地(阪急京都線長岡天神駅下車)

友淵貴山
大府泉北郡高石町北五〇六

月原宵明
今治市常盤町八丁目

中の重要案件を提出していただきたいと思ひます。(多)

★新会員紹介

十二月

遠山可住(兵庫県)正

―無鬼氏推薦

一月

麻生アイト(奈良県)維

―腹乃女史推薦

▼梅木宗一氏(金沢市)は家事の都合で旧冬十一月限り退会された

☆

第四百十二回 大萬川柳

「尾行」

入選発表表

麻生路郎先生選

投句総数六百七十四句

入選 六十七句

放尿をすれば尾行もする構え

路切りで尾行地団駄ふんだだけ

尾行する私立探偵あてられる

興信所ある日尾行はドラマめく

尾行する方はラーメンだけすり

感づいてお好み焼を素通りし

だまされた顔で夫のあとをつけ

嫉妬して尾行している星の月

尾けているわけはないのに駆け出され

追っ手みな斬るに手頃な松並木

セーラー服尾行の異性感じとり

おしのびに尾行は邪魔なお伴なり

感づかれて尾行の十手息をのみ

無駄足とわかって尾行疲れ出る

尾行されそうな預金を下げてくる

顔が売れていぬので尾行の役にされ

小遣いで尾行のこともまくつもり

神戸 静馬

尾行してみたが逮捕に踏みきれず

尾行つかまえてむりやり飲まされて居

尾行して南京町を二度通り

尾けられていとも知らず立読みし

キャバレーの隅で尾行のハイポー

犯人の情婦尾行を連れかえり

女房がつけた尾行を買収し

女摘摸婉然として尾行知る

背の高い方が尾行をされている

尾けて来て私服もくぐる縄のれん

叱ってはみたが母親あとをつけ

尾行する刑事要らないものも買い

尾行する顔をかくした週刊誌

もてもせぬ夫と知らず尾けて来て

誰も彼も尾行に見えて抱き

尾行して街の広さを知っただけ

尾行する影は一輛おいて乗り

尾行まくすべも親分教えとき

串カツの匂い尾行の胃にしみる

尾行する刑事もホシも霧に濡れ

エレベーター尾行へさつと戸がし

まり

行き過ぎた尾行表札見に戻り

尾行ちとあわてて石にけつまずき

暗闇へ来て大胆になる尾行

白だったことに尾行もはつとする

海が見えて尾行も腹がへつくる

美人を尾けたら彼氏が待っていた

尾行してその人柄に自己嫌悪

尾けている刑事もホシも除夜を聞き

ワインドにうしろを映すホシの知恵

トップ屋の尾行へ尾行ついでくる

尾行ゆきどまり山茶花咲くばかり

アナウンサーかくしメイクで尾行する

尾けて来た母と妻とに押さえられ

見えかくれつて来たのが求婚者

尾行者に交通事故を救われる

尾行者を長いトイレで気を揉ませ

尾行者もおんなじ軒で雨宿り

尾行者をびっくりさせたまわれ右

尾行する刑事も名所見てかえり

香港でようやくけりのつく尾行

尾行者もあわてて乗車券を買い

電柱のかげから尾行者首を出し

赤坂で尾行交関払いされ

遮断機は尾けてる方へ味方せず

振りむいた美人に足を早められ

尾行とうとうかげのない街に来る

昭和三十七年度(十二月現在)

大万川柳ベストテン

柳志

梅里

十九平

二〇 遠二

九 圭水

一六五 堺岡

次の特選「女性」五句以内

二月の予告(三十七年度最終)

兼題「多数決」五句以内

切 二月十日

投句先 大阪市阿倍野区松崎町三

ノ一〇 大万川柳会

大鉄局支部

野吉正都塚保中大永松阿植辻
村原本倉脇西塚江尾川万村客白
初紅水求笑岳礎秋永杜万遊子
甫月客女太詩石月断的的

交通局川柳会

緑森藤小橋草福梅米岡浜児富北
野井田本深島村虫島畑岡川
久文力蛸雅醉正文乃孤胡呂淡春
峰夫泉牛巢升則洛字舟蝶志舟巢



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 十二月句会 (大阪市)

12月9日 午後1時
会場——千日前自安寺

62年度のファイナールの句会である。まず司会の黒川紫香氏が起って、このけんらんの幕を開ける。松江梅里氏は不朽洞会副理事長として、この一年を回顧していわゆる川雑十大ニュースを語って挨拶とされた。

戸田古方氏は、氏の親友である宮本又次経博の著書から「大阪と川柳」と題して(本誌次号で発表)興味ある柳話をされ、また土井文蝶氏も「義士の裏話」をユーモアたっぷりに寸話された。

川柳奇術師として、今や柳壇のユニークな存在となった加藤繁雄氏が、とおきの手腕を披露されるなど、かてて各題からユーモア横溢の句がとび出し、川雑家族的句会の名のとおり、明朗な笑いが会場を圧していた。

不朽洞会常任理事会の申し合わせによって、選者の明快な披露、句者の明確な呼称を、より強くすることを中島生々庵

不朽洞会理事長から要望された。こうしたこともあって、きょうの忘年会は閉会まで活気が満ちあふれていた。

川雑支部対抗戦は、立行司清水白柳氏のもとに熱戦がくりひろげられ、玉造支部の宮尾あいきさんが堂々新鋭古豪を連破しての初優勝を遂げ、今月の不朽洞賞杯は米浪進之助氏の佳句に輝いていた。

吉例の懇親宴が同会場で賑やかに催され、岩崎愛二氏もご出席された。(F)

出席者一 路郎・与呂志・満潮・あいき・摩太郎・白柳・柳宏子・圭井堂・黙平・良・牧人・専翁・旅風・晃・市郎・東天紅・野迷路・清人・阿茶・薫風子・多久志・一三夫・文蝶・生々庵・文秋・八郎・柳志・眉木・春果・繁雄・瑞歩・静馬・季生・好郎・狂二・いわを・季貴・すゝむ・一瓢・竹莊・庸佑・舟遊・万楽・紫香・梅里・美都子・みさ子・古方・小松園・凡子・進之助・形水・奈良子・愛二・宏子・腹乃

兼題「失言」 麻生路郎選

失言で労資が荒れて夜が明け 季生
貫録が失言しても騒がせず 庸佑
正直に言えば失言だと騒ぎ 一三夫
失言を酒のうえだと聞く 度量 瑞歩
失言の総理も今は人づくり 美都子
司会者の失言すぐに取消され 万楽
司会者の機智に失言救われる 柳志
失言が野心の程をはのめかし 狂二
失言が本気になって仲間われ 数子
奢らせておいてぬけぬけ失言し 瑞歩
失言までこんな大臣知らなんだ 静馬
失言を陣笠どもが待ちかまえて 晃

失言に妻は横から口を出し 失名
失言をしてから貝になりたがり 春巢
失言が結びの神になろうとは 野迷路
失言のままで別れた友が近き 多久志
うかつさは出戻り娘の齢を聞き 小松園
失言で済ませぬテーブルコスター 与呂志
言葉尻つかんで会議は灯がともり 六童子
末ッ子がババの失言とちめる 柳宏子
失恋を気にせぬ人で頼りなし 季貴

兼題「栄養」 北川春巢選

栄養食をつば向く娘になり初め 隆子
栄養にならん物程子は好み 柳志
姑と嫁とで違う栄養価 柳志
栄養を言わぬ夫に気をつかい 旅風
栄養より小金に魅力病む老婆 八郎
里帰り四五日後まで胃がもたれ みさ子
せち辛い世に安静の栄養の 摩太郎
うまいもの巡礼栄養にはふれず 文秋
栄養失調になつても忘れぬ酩酊の味 どんたく
栄養補給などと男へ酒が要る 六童子
妻と子と連れて栄養食べに来る 与呂志
三日か栄養たつてねむくなり 瑞歩
新菜におされて餓のきも売れず みさ子
栄養が敵血圧又あがり 花梢
栄養不良体質ですと生さぬ仲 八郎
栄養士の夫は外で食べたがり 多久志
ちゃんこ鍋お相撲さんばよく太り 狂二
栄養が過ぎて長男 瘦せ細り 生々庵
カロリーがきつちり合うてうまくなし 古方
やせ薬飲んで栄養だけが効き 狂二
栄養剤ならべ今度は風邪をひき 好郎
栄養のある生煮えに歯が困り 一瓢
栄養にみんないかれたバイト代 すゝむ
ホルモンと酎でつくった力こぶ 清人

栄養は満点縁談まともならず 文蝶
貧乏人うまいうまいがみな栄養 一三夫
栄養をふぐすっぽんで十二月 薫風子
まずくない筈の栄養食が出来 一瓢
栄養は汁にあるよしとがまさされ 季貴
栄養は足って礼節忘れかけ いわを
孝行の栄養食をもてあまし あいき
栄養の足らない顔ですぎ通る 摩太郎
食うものが血となり肉となる若さ 旅風
栄養の余分がヒップへみなまわり 阿茶
栄養の足りない脛をまだ噛り 晃
お茶漬の味 栄養は考えず 春巢

兼題「見切り」 土井文蝶選

見切る気の散称で呼ぶ軽い語尾 和三郎
見切りも大事のころを虫が食い 隆子
ひやかしよやへあつらへ見切られる 生薑
雨の音見切りを待った待ち呆ろ気 六童子
見切り時売りそこなった株を持ち すゝむ

版・写・英・版

技術を誇る

親切で
早い

四楽部
台木部
一貫作業

東洋写真製版所

有限会社
大阪市阿倍野区阪南町中2の6 電話 (651)0567・0568

見切ります雨が崇った本戎 圭井堂
ひと癖もふた癖もある見切り品 旅風
見切りなはれといわれ見切る気になれず 古方
見切り品喉がぬばかりに目を通し 旅風
こころと見切ったあとで値が上り 柳宏子
見切品エプロンで来てかきまわし 柳志
乱れとぶニュースに見切りつけかねる 柳宏子
お見限りでしたわねえと叩かれる 梅里
見切品の中から歳暮のものも撰り 小松園
不景気へ見切りの品ものぞくだけ 一栄
回れの靴が見切りと見えへんか 専翁
うぬぼれと欲で見切りがまだつかず 阿茶
見切りつけた恋愛のに涙が出 季生
見切りつけ歩けばバスに追いつかれ 生々庵
見切品どっちもひだり足の足袋 梅里
見切品師走の金をかき集め 野迷路
見切品売場で夫婦顔合せ 小松園
もう見切りつけたらどうと嫂の声 摩太郎
じいさまが死んで暖簾に見切りつけ 晃
ふんざりも見切りもようせず株ですり 一三夫
見切品指値に合わしてこしらえる 静馬
赤札をつけて半端を山と盛り 進之助
新世界サクラが並ぶ見切り品 与呂志
松明けてオーパー半値につけ替える 圭井堂
見切品手と手がからみおうている 失名
見切品世帯盛りがかき回し 牧人
見切品得心ずくで着る世帯 旅風
東へ見切りをつけた三年目 阿茶
見切品女腕力出す所 一瓢
見切つとくと言われ財布ひっこめる 野迷路
見切品洗えば子供の寸になり 静馬
見切つときなはれとキヤンシエらつかせ 柳志
見切り品らしくは着せぬ歳の妻 旅風
焼きもちもやかなくなつて他人めき あいき
見切品に似た三十のあせりよう 進之助

兼題「日めくり」 八木摩太郎選

日めくりの旗日連休だけ 魅力 繁太郎
日めくりが変っただけのお元日 宗義
失算の日から日めくりそのまんま 一栄
家々の暮し日めくりだけが知り 花柏
日めくりはもう元日の大晦日 梅里
日めくりを捲いてみたとはじまらず 野迷路
日めくりもめくらず借金ばかり溜め 紫香
大晦日子は元日をもうめくり 狂二
日めくりも去年のままでうらぶれる すむ
旧暦のない日めくりへ祖母の愚痴 あいき
日めくりも変えて初発の駅にする 好郎
明日と言う日へ日めくりの無関心 狂二
日めくりへ社用ゴルフと書き残し 牧人
養老院日めくりだけが風にゆれ みさ子
日めくりのマルはデートを約す夜 梅里
日めくりの金言読んで食にたえ 狂二
日めくりが責任問うている節季 専翁
失恋をして日めくりは放つとかれ 季生
日めくりもやめ世帯で吊つたまま 良
日めくりの残り少く子の晴着 梅里
日めくりの一枚当落決まるの日 繁雄
日めくりを見て散髪に出かけたり 満潮
日めくりに聞けばギヤギヤすな師走 進之助
日めくりに流れる質の日を印す 圭井堂
初天神日めくり特徴になる落目 眉水
日めくりの追ひ回わされて金の事 文蝶
日めくりの妻に知らせるノモをす 与呂志
楽しみの日へ日めくりの渉らず 文秋
日めくりを遂って抜毛がからむ櫛 一瓢
日めくりは大安全を落して来 一三夫
日めくりのもうやせられぬ大晦日 阿茶
日めくりにかかわりもなくわははくび 摩太郎

席題「にせ札」 菊沢小松園選

にせ札を見分けるほどに持つていず 瑞歩
にせ札は銀行員を疲れさせ 竹莊
にせ札が本物以上に値打ち出る 庸佑
にせ札を造る頭を惜しまれる 旅風
千円を受取る顔の目がすわり 文蝶
万全の策へにせ札顔出さず 文秋
にせ札がほしいと思ふ一枚きり 白柳
にせ札をたしかめる間もない忙しさに 静馬
にせ札はおどろき不況はつづくなり 牧人
にせ札に銭勘定のひまが要り 文蝶
大売出しにせ札なんぞ気にせず 狂二
にせ札の方が値打ちが上つて来 狂二
にせ札へ聖徳太子は苦笑され 一三夫
ホンモノワシレヤシシやと太子さま 眉水
にせ札をふと思うほど落ちぶれる 晃
にせ札へ太子くすぐりたい思い 進之助
にせ札のことで世相をいきどおり 春巢
千円でおつり待たせてすかされる 萬楽
本職も先ずはにせ札の出来をほめ 良
風采と千円札を比べられ 好郎
にせ札やないかとスリもすかして見 静馬
アリバイのつもりでにせ札たしかめる 小松園

席題「おもわく」 水谷竹莊選

おもわくがあつて言うだけ言わしとき 晃
おもわくが外れたまま年を越し 文秋
おもわくもあつてお見合いでいる気 生々庵
北浜のおもわくくるわす車中談 進之助
おもわくが黒幕の名を言わす 萬楽
おもわくのある接待と知って受け 庸佑
おもわくの土地でもうけて株ですり 阿茶
おもわくがあつてチップをはすんどく 晃
おもわくがあるのか社長低姿勢 満潮
おもわくがあるのか社長低姿勢 春巢
おもわくに男と女の食い違い 眉水

・ 謹 賀 新 春 ・

川柳雑誌社ハワイ支部

ウイロー社

同人一同

南海電気鉄道株式会社

川柳部一同

明和川柳研究会一同
河相すゝむ
西宮市川東町一〇九
電・西宮三局〇七六七

菱田満秋
名古屋昭和区一ノ五〇

思惑が如き人生 又たのし 与呂志
はずれたおもわく結局欲でした 阿茶
おもわく通り女ついで来る 満潮
おもわくと違つたことは言わず 柳宏子
おもわくが外れ株売る十二月 萬桑
あつさりと思惑通りで夢がさめ 与呂志
おもわくを妻に相談する 落目
けちんぽがおこりおもわく見抜かれる 柳宏子
おもわくを聞く理想が悔れず 青佑
思惑があり二次会へ行って行き 多志
おもわくがある歳暮は嵩が張り 一三夫
おもわくで儲けはったという噂 古方
苦勞性おもわく通りで又案じ 与呂志
気味悪い程おもわくが図に当り 多志
思惑の追加注文とんと来ず 圭井堂
思わくに先ず一枚の宝くじ 狂二
ついてくる子のおもわくはしたも 黙平
欲の皮おもわく通り突っぱれず 竹莊

席題「警戒」 金泉萬桑選

黒眼鏡警戒される目を感じ 春渠
部長交えて歩く巡査の眼を感じ 古方
にやにやと笑うて来るから警戒し 晃
酔うたふりパーテイ券を警戒し 多志
バトカーのサイレン霜夜へあがりたし 阿茶
いつにない土産があつて気味悪く あいき
警戒に回る亭主は犬を連れ 摩天郎
とんど焚く役引きうけて寝ずの番 圭井堂
警戒をしすぎて恋を取り逃し 眉水
警戒をしてか女は酔おうとせず 一三夫
警戒心強い男でもてもせず 八郎
警戒をすませ刑事のお正月 瑞歩
歳末警戒店の間を貸しお茶も出し 文蝶
警戒をなさ笑うよう 知能犯 青佑

警戒の網を大物だけが抜け 春渠
警戒しなはれと初老の腰を病み 生々庵
警戒されていると知つた電話口 柳志
ボーイフレンド警戒されて熱がさめ 文蝶
非常線破る口実教えとき 小松園
警戒されていると気付いた金づかい 柳志
警戒をしたか言葉が改たまり 晃
万引きをしそうな客の横に立ち 晃
警戒をせねばならない人同士 旅風
白バイを意識している朝の霜 白柳
警戒の線でうちよろしける株 圭井堂
警戒はちゃんとしている笑い顔 旅風
町内の警戒酔うた元気で出 萬桑

雪月花戦「めし粒」中島生々庵選

一粒の飯にも感謝の過去があり 進之助
威厳ある髪にめし粒かしこまり 柳宏子
めしつぶの意見聞いている子沢山 摩天郎
子がふんだ米つぶひうも母として 狂二
めし粒はみんな拾わす子に上つて 清人
飯粒をご用意から教えられ 良
めし粒をつけたまんまで子を叱り 晃
めしつぶを拾う手先に老を知り 多志
めし粒も特撰米の艶を出し 小松園
めしつぶをくすすすにぎる腕もち 青佑
冷やめしで封したらしい香料 一三夫
めし粒で貼った名刺の二階借り 梅里
めしつぶを素知らぬ顔でとつて 旅風
封をするめし粒隣りでもろてる 静馬
めし粒を雀にやって子にさとし 阿茶

維新 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報
オートメ化瓶がひとりで行水し 城東

オートメに追い駆けられて機械じみ 寿美司
裾分けて如露の水やる菊人形 風仙洞
惜しみなく秋の香を着て菊人形 清子
神棚の菓子ゴキブリに戴かれ あいき
風呂の棚美容石鹸母のもの みね子
あればあるで棚一杯に物が乗り 凡九郎
素人の棚へは軽い物をのせ 是江
ストープをおろした棚へ扇風機 一栄
網棚へ土産が重い旅籠 六竜子
ドライブをの免許が待ちかねる 洋子
棟上げて槌の音聞くところ手 井平
楽しめは社長自慢の菊造り 政子
楽しみの旅行も予算で四苦八苦 かつみ
そわそわと出るとは入る旅仕度 豊子
昼弁当食べて楽しめ一つ減り 宇佐夫
子沢山末のたのしみ言うとれず 珠笑
社長には知らぬ楽しめ月賦済む 一舟
たのしみがあつて姑こせつかず 文秋
せめてものたのしみ両手伸し寝る 白柳
あくことを知らぬ女の顔を塗り 柳宏子

維新 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

役得に利用されてる程もうけ 凡子
三次会これから役得でないお酒 八郎
迷惑なのはすかされる札のこと 白柳
ニセ札へ出納係の気が疲れ 柳宏子
大臣も時評漫画へ苦が笑い 清人
可も不可もない顔漫画家の手に負えず 小松園
落選の方はばかりへ違反の手す、む 落選
弱り目は神も仏も知らん顔 双桑
弱り目の中で真の友を知り 良
弱り目に親戚中が寄りつかず 梅里
弱り目へ創価じわじわ説きにくる 静馬
ライバルがハンサムだから落ちつけ 狂二

・ 謹 賀 新 春 ・

大阪通信病院

烏ヶ辻川柳会

会長

足立春雄

若林草右

市場茂子

西辻竹青

山口竹志

古谷まさる

生越正徳

津村神峰

銭谷お里

森下愛論

柳本路児

田中敏行

中谷ハナ子

水谷竹莊

小野木凡平

木村よしを

久保正寛

重田安紀子

北川春葉

半田夏生

堀仙男

橋本幸男

川維玉造支部

西田柳宏子

牛島水京

城一舟

川柳雑誌社

岡山支部

与三郎になるなどハンサム意見され
 ハンサムのまことに美しい国なり
 ハンサムが隣へ掛けて気がつかれ
 ハンサムが大仏さまと写される
 ハンサムの兄と出掛けて冷やかされ
 ほんとうの黒幕意外なことに居り
 黒幕の入知恵だけが筋通り
 黒幕を吾が身可愛い声になり
 黒幕も欲のないのはあやつれず
 文秋

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

話し合う場で損得にひっかり 喜山
 野心があつて損をしたがり 喜由
 井の盛学生に有る人氣 紅鳥
 冬近し井の湯氣を抱く日あり 尚平
 レンズパイに群衆の疲れ 礫
 新聞にいきどおりあり山レンズ 烏雀
 知性と美貌に女のコンタクト 美佐緒
 霧笛遠く近く海の騒音となる 高雄
 騒音の絶える頃から目がさえる 静香
 騒音の街散髪をして帰る 司郎
 騒音の片すみ塙の群れて 親生
 落葉する中へ忘れる人を置く 豊次
 忘却の一と角に置く或る小文字 晴芽

川維 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平報

米の価も知らずボンゴとこう手 味平
 米の価を人が言うから氣にもする 雅城
 米価批判し温泉客溢れ 喜芦
 インスタント料理へ姑淋しい 久雄
 米高でおかずをひびく家計簿 六角
 芹摘んで夕餉に風味を添える母 光郎

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

焼肉へ鼻うごめかす 隣の子 曉舟
 お使に重宝がられる 隣の子 泉水
 親切にすれば図にのる 隣の子 あき坊
 家の子も一緒にたずね怒られず 静杉
 お隣の子が落第で胸がすき エス子
 隣の子讃美歌 唱う日曜日 銀水
 隣の子思春期ですと親が言い 萩路
 隣の子家の内緒をよく喋り 万里歩
 悪いことみんな隣の子に負わせ 溪紅
 お三時が出るまで帰らぬ隣の子 快夢起
 迷い子と聞いて顔見りや隣の子 弦月
 隣の子言葉に親の国訛り 笑有
 流行風邪隣の子まで来て慌て 揮山
 来客が褒めてくれたは隣の子 紅茶
 交替で主婦の仕事は 共稼ぎ 美潮
 主婦なるが故に名もなく恋もなく 麗花麗
 主婦の座は専し我家の守り神 浅太
 一日の主婦の務めは独楽に似て カロ女
 隣縁も増えて貫通ついた主婦 沁丁花
 家計簿に無言で写る主婦の顔 内海
 主婦ぶりに将来は敷きさしあり 平八郎



美容院主婦半日の骨やすめ 須磨子
 我母も主婦の苦勞に瘦せ給い 静起

川維 出雲句会 (島根県)

尼緑之助報

産声に男の呼吸ととのえる 章峯

グロンサン飲んで食欲待つお昼食
 売上げの通りに夜の食が向き 岬月
 かけひきを男の中で認められ 外樹
 年上に惚れてかけひきだけ覚え 重信
 かけひきもバツターへ力むだけ 柳狂
 食欲が出たとうれしい便りが来 やすを
 もう他人ではない嫁の刺烹着 独仙
 食欲の進むベッドで鶴を折り 芳正
 かけひきの自信煙草の輪を一つ 李朋
 屋台酒他人同士の肩を組み 晃男
 大声と共にこの世に呼吸する 緑之助

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

片ちびの下駄根性に似て佇びし 桃里
 駄々こねる子にぎりぎり二つあり 胡風
 根性がとうとう刑務所まで歩き 秋月
 根性が知れてつき合いやすくなり 伊久野
 職人の根性金をようためず 一声
 根性の悪い大根ひんまがり 東岸
 根性は悪いが特殊技能持ち 照路
 根性のないのがヒロヒロさし戻り あやめ
 根性が俺に似ている子をなげき 浄美
 星取りの勝負に生きる根性玉 秀陶
 親の名もそえて根性はめちぎり 宗義
 職人根性曲った釘を打って見せ 芳月
 根性があつてこゝまで出世しを 良江
 根性なしといわれた末っ子の世話になり ひで代

岡山国体

川維 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

全国が岡山弁を真似て去に 久米雄
 灰色の人生火葬場までつづき 佐加恵
 灰色のくらしが酎の味に馴れ 宗義

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町 5 (361) 9373 代

支局 東京都千代田区神田竈治町 2 (291) 9629 代

名古屋昭和区村田町 2 (88) 9069

川維 宇都支部句会 (宇都市)

津秋六花報

灰色の部屋にも秋の風が吹き 哲郎
 灰色の雲に不吉な予感がし 秋月
 灰色の世に拗ね赤い本を読む 胡風
 人生を灰色と見て世をなげき 久米雄

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

読めぬ字のところが寝不足横になり 芳正
 上役の寝不足 机渠に見え 明朗
 寝不足の草刈蜂の巣を破り あきお
 寝不足の眼へ眼薬のしみること 祥月
 寝足りないあくび大きく起きて来る 晃男

寝不足の口へビールがほろ苦い 佳仙
寝不足の欠伸隣へ分けてやり 和幸
寝不足へ執務する字も踊りがち 柳狂
寝不足をまとめて返す日曜日 利徳

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

泣いて勝つことを乳呑児もう覚え 素瓢
巻き尺が背中を走るいい話 一机
徹夜した手当無駄には使われず 雄々
秋深し脈とる指の冷たさよ 蛙眠子
心の傷痛む日もありコップ酒 鶴丸
生返事殊々々と下り行く 天邪鬼
大臣の祝辞はるばる到着し 一保
湯豆腐の味が出てきて秋を知る ささよ
町内の融和を計るバス旅行 忠之
大山が見えがくれて故郷近し 一男
B Gの和服見合いと間違われ 雨宵
注射より医者意見が身にこたえ 幸子
特級酒だと念押しして注いでくれ 秀峰
急用を臨時ニュースでふと忘れ 無閑
喚いかけの煙草忘れる用が出来 八歩

川維 大鉄支部みなと句会 (神戸市)

植村客遊子報

乳絞る手が健康な丸み持ち 白溪子
不意の客寿司屋へ走る子の機嫌 初甫
深夜喫茶隠しカメラに気付いて 杜的
相談をかける人なく溺へ来る 智一
愛称で呼んで恋愛かと聞かれ 客遊子
立案書小型の辞書に助けられ 蘇堂
何もかも小型で老後の二人きり 万的
愛称のまま送られて嫁に行き 有法子
やや小型で吾子は保育器で眠り 美由起
娘むこだから相談にのってやり 千甫

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

白バイが来て弥次馬の数がふえ 竹比呂
人間のよろさを知った事故現場 勝喜
弥次馬がさわいだ程の事故でなし 利子
事故現場速度をおとす二三日 斐山
貴君と聴く鈴虫平和な月が浮き 寛子
腹立した事を虫のせいにして詫び 勝子
仕事の虫を妻は気に入らず 海鳥
修身をきらう教師のエゴイズム 天花
先生という商売で地味に生き 十面子
先生の苦勞を知った参観日 三郎
生徒には厳し我が子は見てやらす 和
人生に酒あり酒に友があり 山里
全快へ自信が一つ一つ湧き 義夫
招待は受けたが手ぶらで行けず 松風

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

老眼鏡やつと夫婦のよさわかり 八郎
他人の飯食うて世間の味を知り 静幸
忘れ物おかみの感で助けられ 宏子
忘れもの届ける方が高うつき 摩太郎
弁当の詰ったものもある忘れ物 雄声
骨箱を忘れ市電に電話掛け 句念坊
忘れ物の中味悪魔の声聞こえ 和郎
一列車みな遅れさす忘れ物 圭水
も少して放ると粗末な忘れ物 路郎

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

一人旅二本目から酒の味 春巢
出張のパパから雪の便り来る ハナ子

惜まれて人気の落ちぬうちと辞め 没食子
人気者同士の式ははてになり まさる
作られた人気が漏れ自滅する 敏行
豆歌手に大人の人気さらわれて あいき
人気もう恩師の御座忘れかけ 宏子
人気再びテレビへ返り咲き 好治
月末に残っただけは飲んで行こ かおり
予算高越えて月末苦勞する 竹莊
月末の帳尻合す好い女房 愛論
月末のデートはほんとにむづかしい 安紀子
出張を兼ねて銀婚旅に出る 春雄
刑務所ともいえずつと出張しています 風仙洞
出張の旧友飲んで去に食って去り 幸男
先だたれしみじみわかる酒の味 蔭兒
これはいいでは一杯とくるお酒 荷水
家も子もはっちゃかして酒の味 竹青
やりくりの酒は味より量でゆき おじぎばかりして飲んだ酒の味 路郎

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

縄張りだなどとチンピラ生意気な 東雲楼
縄ばりに野次から野次へチンピラ 幸吾
応援にかわいた喉に縄のれん 日出男
縄付になって故郷の母 偲び 紅月
縄飛で遊んだ恋が共白髪 摩太郎
一すじの縄が彼女を抱きつかせ 美代
ダンブカー走って町が殺気だち きはち
電車でも突つ飛ばす気のダンブカー あきら
突貫工事へタタキ邪魔なダンブカー 六童子
美粧院出るやダンブの砂ぼこり とも子
ダンブカーやんちゃ坊主に似た姿 圭水
明日の旅つかれぬようにしてねわり 正倫
疲れなど知らぬ男の行状記 はじめ
優勝旗つかれ忘れた顔で受け 周一

疲勞とでもしておまじょう 影断書 八郎
世帯ずれして鏡台へ見いの顔 呂人
疲れたと言えは二号がふくらる 呑天
気疲れが笑えぬ嫁にしてしまひ とも子
気前よいチップにそつとすかしで 見吉太郎
ニセ札で買物ごっこ幼い日 柳太
ニセ札でもいいわと女酔うている

どんぐり川柳会 (羽曳野市)

吉川静波報

片肺を認め将来の夢せつなきよ子
将来に良いと三つ子にピアノ買い 花江
退院日新婚気分分で囲む膳 草春
将来を誓ってからの変りよう みどり
将来は吉との占いはかり引き 紀太郎
豊作を知らせる様に排気音 常人
将来のプラン描いて斗病し 痴亭
腰かじる子等へ将来頼つとり ならを
将来を語る二つのレモンティー 百舌郎
初恋ははかなく将来待たず散り 弥生
一豊の妻を気取るが出さぬなり カッパ
将来を見にくれと言ふ頼もしさ 与太郎
将来を楽しみ義理の子を育て 静波

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭

鮎の店

串の店

阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL (七三) 三九三五番
アベノ橋近映地下食通街
TEL (七三) 〇一四七番
千日前 大劇裏
TEL (三三) 二七一〇番



柳 樽 室

路 郎 生

★世界は絶えず動揺を続けているが、ボタンを押さぬだけにとりえだといえよう。柳界も絶えず微動はしているがさしたる変化もないようだ。少しは歯切れのいいところを見せて欲しい。柳界の老齢化をなげくばかりが能ではない。柳界の子規や啄木の出現はいつの日か。新進気鋭の士の靴の紐をとく位の覚悟は持っているがどんなものであろうか。★本誌も一九六三年に踏み切った。これも愛読者、寄稿家、広告主、不朽洞会員諸氏のお蔭である。深甚なる謝意を表する。★昨年は関東方面の旅で、柳人の多くに接した。本年は九州方面其他の柳人を訪ねたいと思っている。★昨年は根元紋太、川上三太郎の両君が相ついで入院されたのでドキッとさせられたが、日たにまし快復されているので愁眉を開いている。★私は昨年中、風邪一つひかなかつたが、船のせいでしょうか。地下鉄の階段では自負がない。地下鉄の階段ではビールでも這入っていない限り、いまだに後押し付きだ。しかし仕事の方はオーバーするほどやっているからご放念ありたい。本年は出版ブームを企画している。★本年度のご期待が願いたい。

★大阪市中心図書館の短詩文学文庫の仕事も、次ぎ次ぎのご協力者がある。小生晩年の情熱は燃やし続けている。柳人諸氏はいうまでもなく、江湖の愛書家諸賢のご協力をお願いしたい。この仕事の至難なことはいうまでもないが、むずかしければ難しいほど、私の情熱は燃えあがるので、私の最後の日まで挫折しないことを誓う。★本年は又各地に選挙が行われるが、公明選挙を公明選挙委員の手に委ねるだけでなく、

新春を賀し奉る

川柳雑誌社

麻生路郎 中島生々 編集局
麻生路郎 北川春 戸田古方 清水白柳 真鍋一瓢 水谷竹莊 不二田一三夫 橘高薫風子 西田柳宏子 句会部
黒川紫香 菊田いさむ 総務部
八木摩太郎 林宏子

各自が公明選挙を行なってもらいたい。時代は百年河清を待つようなノンキさではない筈だ。誰れに頼まれた訳ではない特にお願したい。昨年の参院のように、ツバ

を吐きかけてやりたいような人を当選させることだけはご免蒙りたい。その人に対する私憤はないが、立候補する人も人なら、それに投票する無知な人々に対して公憤を感じずにはいられない。★柳人にして政界に出るのもいいが、その多くは政界に巻き込まれ、彼等政治家を浄化するどころか、自分の素質すら見失い、泥沼に足をとられただけは避けて欲しい。老妻心かも知れぬが、過去にその例が少なくないので一寸筆を飛ばしておく。

ペンの散歩

▼路郎先生も各界からの依頼原稿に本誌の原稿と、まったくの昼夜兼行でお気の毒なくらいだった。商家のゴツタ返す店先きも、机上のペンと原稿用紙の乱舞も師走の忙しさにはなんら変わりがないわけである。▼富士野鞍馬氏、北川春葉氏、戸田古方氏をはじめ、次号へ惜しくも割愛した好読み物が相当に多かったことを執筆諸氏や読者諸賢におわび申し上げます。▼ウサギのようにぴよんと跳ねるいどでは弱い。みんながリやる気を出して、それゴッリンするまで突っ走りましょう。(一二三)

★一月句会—川柳雑誌社

★南海電鉄句会・17日(木)六時、題、駅長・成人・小正月、所、難波親和クラブ、みなと句会・28日(月)六時、題、招待・夢・やけくそ、所、相生町電停下車浜側(一分左側)電鉄神戸職員集会所和室、投句、神戸市青合区浜辺通五丁目電鉄神戸港貨車区植村客遊子宛。★木次句会・12日

(土)、題、兎・動く・雪、所、木次町役場、★米子句会・15日(火)一時、題、うさぎ・楽しみ・笑う、所、米子公会堂和室、★明和研究句会・13日(日)一時、題、松・草原・鏡、所、阪神鳴尾駅下車東南二百米鳴尾公民館、★かがみ句会・6日(日)十時、題、初対面・初荷・うさぎ・福・吊柿、所、池田古心居。★阿倍野句会・20日(日)一時、題、国・家・人・憩、所、アベノ区松崎町三ノ一〇割烹大万、★玉造句会・10日(木)七時、題、うさぎ・跳ねる・ぬくもり、所、市電玉造南一〇〇米大阪信用金庫、★宇部句会・13日(日)一時、題、えび・双六・淵・ステップ、

川柳雑誌社主催 本社新春句会

日時 一月七日(月)午後六時
会場 自安寺(妙見さん)電話四一七八番
兼題 「人づくり」三句 中島生々庵選
「混雑」三句 土井文蝶選
「新調」三句 菊沢小松園選
「幸福」三句 若本多久志選
席題 三題当日発表 麻生路郎
柳話 昭和三十七年度不朽洞賞優勝者
表彰 一カ年間本社句会全出席者
短冊交換会 有志の方は各自一葉ご持参
呈賞 各題天位・各題天位を路郎選により天位に不朽洞賞。
会費 百円
★投句だけの方は郵券三十円封入(切は一月五日)本社宛。

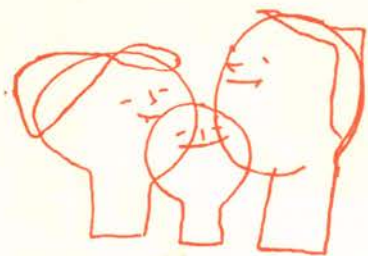
謹賀新春
さんばつは
何はともあれ
男まえ

岸南柳

大阪市阿倍野区天王寺町北一ノ十八

所、宇部市東区恩田長沢市宮住町津秋六花居。▼京都句会・16日(水)夕、題、忘・断水・失笑・所、四条繩手仲源寺。

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

麻生路郎著

好評噴々

新川柳魁賞

川柳の味わい方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にして、その他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資するものとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

発行所

川柳雑誌社

電話大阪(671)六〇八一
新幹線口座 大阪 七五〇五〇

価二五〇円
送料八〇円
B6版
二五〇余頁

初詣

正恵方は南海沿線

住吉大社

水間観音 方違神社
大鳥大社 もず八幡
淡島神社 紀三井寺
東照宮 日前宮
五津島神社 電車バス大増発

お問合せ
(641) 8686
和歌山(2) 2321

南海電車

川柳集



橋高薫風子著 麻生路郎序

定價二百五十円 送料六〇円

著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って採まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

川柳雑誌社

発行所

Printed in Japan

川柳雑誌

第三十八年 第一号

(禁転載)

半力年 五七六円(送料六円)
一力年 一〇八〇円(送料六円)

昭和三十七年十二月廿五日印刷
昭和三十八年一月一日発行

大阪市住吉区西四丁二丁目二五番地
編集者 麻生路郎
発行所 川柳雑誌社

募 集

課題吟募集

外流わ 大鶴喜由選
な 戸田古方選
交れ (十句以内) 森下愛論選
(十句以内) (二月十五日締切)

朝角勝 尼緑之助選
ち 友淵貴山選
気 (十句以内) 内藤さき子選
(十句以内) (二月十五日締切)

毎号募集

近作柳樽 (雑詠十句以内) 麻生路郎選
文 北川春巢選
柳 麻生路郎選
章 (評論・研究・感想其他) (毎月十五日締切)

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑詠を募る。
▼ 「川柳塔」は誰でも投句が出来る。
「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

新発売



生きぬく幸せの薬 アスパラ

■アスパラはまずこんな時に
疲れ易い時・疲れた時・全身の抵抗
力をつける時・肝臓が弱っている時
・二日酔や自家・妊娠中毒・筋肉や
関節の痛み・病中・病後の回復・食
欲不振・便秘・脚気・湿疹・皮膚炎
60錠・120錠・300錠・内服液アンプル



暖たかい近鉄特急で……
お伊勢さん初詣
伊勢志摩初旅

伊勢市駅または
宇治山田駅下車
大阪上本町から
1時間55分
近鉄名古屋から
1時間33分
二見・鳥羽・賢
島へバス連絡
お問合せは…
大 阪771-8551
名古屋 57-2531

**近畿日本
鉄道**

賀 正



菊正宗

清酒

一番よい酒
うまい酒

宮内庁御用達
株式会社 本嘉納商店
神戸・灘・御影